

悪魔の占い師

ベリアル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、大切な存在を傷つけられて手にした神器。

全ては、最初は、きっかけでしかなかった。

動き出す運命の輪。

目次

| | |
|---------|-----|
| 呪いの占い師 | 1 |
| 女の勘 | 5 |
| 天命の札 | 12 |
| 選択 | 21 |
| コンビ | 29 |
| 悪魔（デビル） | 40 |
| 分岐点 | 53 |
| 花嫁争奪戦 | 59 |
| 聖剣 | 71 |
| 太陽の古代生物 | 78 |
| 神器舞踏 | 84 |
| 2人の到達者 | 91 |
| 占い師の恋人 | 103 |
| 閑話 | 113 |
| 閑話・神器説明 | 118 |
| 閑話・過去1 | 122 |

呪いの占い師

少年と呼ばばいいのだろうか。冥界にて屍の山に立ち尽くすボロボロのローブを身にまとう少年は、魔術師を暗示するタロットカードを懐にしまう。

生存者は彼しかない。彼一人で大量の人ならざる異形な死体を積み上げたのだ。

「運がよかったな、今日は」

独り言を呟く。もし仮に誰かに聞かれたならば、恥ずかしさのあまり悶えるだろう。今悪魔が住まう冥界で話題になっている有名人。本名は明かされず、正体不明とされているが一部は彼を知る。

“呪いの占い師”

世間ではそう騒がれている。賞金首を狙う意から呪い、そこに占い師は彼が使うタロットカードを指す。彼は所謂賞金稼ぎ。どこぞの一味を連想させられるも、彼は誰と組むことなく一人で小さな組織や賞金首を倒して収入を得ている。

今日も今日とて、危ないお薬を販売していた組織を壊滅。その資金をありがたく頂戴した。

「帰るか……………」

気怠げな猫背の状態でその場から去る。

「……………アアアア……………」

が、森がある方角に目を向けるとため息を吐く。しまったばかりのタロットカードを取り出すと、ひとりでに宙に舞ってシャツフルされていく。そこに一枚のタロットカードが彼の手に落ちる。そこに暗示された“星”が暗示されるカードを見た。

「……………運が良かったな」

“星”のカードは金色の粉へと変化、彼の周囲を舞うようになる。すると、足は地を離れ森へと飛んでいく。景色はどんどん流れていく。悲鳴はまだ聞こえてくる。それを頼りに進んでいくと真紅の髪を背中まで伸ばした少女が森を駆けぬぐ。後ろには真っ黒い鳥のような翼を生やした集団が少女を追い回している。

「墮天使か……。やっぱ運が悪かったかも」

少年は先頭を切る墮天使の背中に急降下。流星さながらに勢いは増していく。

「ぐはぁー！」

小さなクレーターの中心には地面に沈没した墮天使とそれに乗る鼻より上をローブで隠した少年。

「何者だぁー！」

「戦車」。ついてないな」

相手の言葉を無視して新たなタロットカードを出現させた少年。光が消える代わりに、先端に刃が備えつけられたマスケット銃がどこからともなく少年の手に握られた。それに反応する墮天使の集団はすぐに少年が何者なのか理解した。

「呪いの占い師！」

「チャリオット・オブ・カノン」

声を張り上げた男の上半は吹き飛び、下半身だけとなった肉体は血をまき散らして木々の養分となる。

「散開！」

たった一人の子供を中心に大の大人が数人がかりで取り囲む。

「一人はグレモリー家のガキを追え！」

紅い髪の少女はその言葉を聞いて、立ち止まっていた足を再び動かして去っていく。一人の墮天使も動き出すが少年のマスケット銃からドングリほどの弾丸が射出され、動きを止めてしまう。

「グレモリー家？」

聞き覚えのある単語。思い出そうとしたが、光の矢が記憶の旅路に立ちふさがった。矢を放ったのは顔立ちが整った青年。

「なにゆえ邪魔をする、呪いの占い師」

「本日の運勢でな」

「邪魔をするなら容赦せん！やれ！」

細剣を片手に飛びかかる集団に一切の油断は見られない。すでに仲間が2人もやられたからだ。憤怒しながらも警戒を怠らない心構えだけでも厄介な相手であると認識した少年。マスケット銃を槍の

容量で裁き、1人の首を割く。そこで一人分の穴が空く。死体を背負い投げ。盾にして刃から身を守る。仲間だった死体を突き刺した集団は動揺する。その隙を見逃さない少年はマスケット銃を集団に向けている。

「チャリオット・オブ・カノン」

銃口に見合わない巨大な弾丸が密集した墮天使を襲う。一人が先ほど動揺上体が消し飛び、一人は右腕を失う。彼の攻撃は終わってない。腕を失って冷静さを失った墮天使の後頭部に弾丸を打ち込み死に至らしめる。

「残り3人」

3対1の攻防。集団を率いている青年を中心に攻撃を凌ぐ少年は隙あらばマスケット銃で墮天使を撃ち抜こうとする。しかし、3人の連携は彼が思っている以上に堅実で防御寄りの編成。墮天使は気づいていないが、彼にとっては厄介な攻撃。

「やべ……………」

突如マスケット銃が“戦車”のタロットに戻る。少年は攻撃を回避しつつ新たなタロットカードを引く。暗示されていたのは本日2度目の“星”。

「ここは“塔”か“太陽”だろ」

空に浮かび上がり、愚痴を溢す少年。墮天使達は彼の行動の意図にすぐさま気が付く。

「逃げるのか、貴様！」

「“星”は戦闘向けじゃないんだよ。“悪魔”じゃないだけマシかもな」

それだけ言って去っていった。

「クソツ！グレモリー家の長女誘拐は失敗！仲間は殺される！占い師如きが！次は殺す！」

「次なんてないさ」

強烈な殺気に身を震わせた墮天使3人。真紅の髪を伸ばした好青年は貼り付けた笑顔を3人に向けている。しかし、内心穏やかではない。後ろの彼の妹であるリアスを攫おうとしたからだ。

「サーゼクス……」

「あれが”呪いの占い師”か。なかなか楽しげな神器だったな。さて、君たちの処分は死刑だ。妹を攫おうした罪は重いよ」

「ぬかせ、悪魔が！」

阿吽の呼吸で動き出す墮天使。

「墮天使に言われたくないよ」

“超越者”の一人が呟く。

瞬間、“紅髪の魔王”とその妹以外は屍と化す。

月日は流れ、駒王学園の数ある教室の一室で一人机に突っ伏している少年。卑猥な言葉を連発し続ける少年。

名前は比企谷八幡。

そして、兵藤一誠。

女の勘

駒王学園。学園のトップのほとんどが悪魔関係者で占められる。普通の人間の生徒も在籍しているが、誰かが悪魔であることは知らない。知りたくもない。もしかしたら、隣の席に座ってる奴がそうかもしれないのだ。この学園には悪魔・天使・墮天使。各勢力のトップが集まって和平が結ばれたこと、各勢力のVIPが所属する場でもあるため、三大勢力にとって重要な地域として扱われるようになっていく。

しかし、存在こそは知っているものの関わりたくないのボツチの性（サガ）。入学して1年以上になっても、悪魔やら天使に直接的には関わっていない。2年の男子生徒が冥界で発行されている新聞の一面を読んでいた。尚、この時間は彼が苦手な家庭科なのでサボタージユ。

「呪いの占い師消息不明……。元々消息なんてあったもんじゃないだろ」

新聞にはそういったことに詳しい専門家が意見を述べているが、ネタがなかったので引っぱり出しているのが見え見えだ。とはいえ、一時期、〃呪いの占い師〃が有名であることは事実。それなりの部数は稼いでいる。当の本人はMAXコーヒー啜って、他人事のように記事を読んでいた。

〃呪いの占い師〃。呪いとは名ばかりで犯罪者を狩る義賊ともいわれている。本人はそんなつもりはないが、彼の行いは結果的に人助けに繋がる行いが多く見受けられた。グレモリー家のご息女を助けたと気づいた時、面倒なことをしたと嘆いた。その後は何事もなかったため、杞憂に終わる。他にもシトリー家などとやらかしてはいない。魔王や神に匹敵するのではないかと噂されているが、本人はそれはないと心の中で断言した。

「あらあら、おさぼりですか？」

「それ以外になににみえますか？そういう、先輩はさぼりですか？」

「うふふ、それ以外になにに見えますか？」

妖艶な笑みを見せる駒王学園の二大お姉さまの一人、姫島朱乃は八幡同様授業から抜け出していた。さぼったのは授業が嫌だからではなく、八幡自身に用があったから。普通ならば、彼女のような美女が八幡のような目が腐ったポッチに話しかけることなど万に一つもない。ましてや、緊張でどもつてまともな会話すらままならないだろう。ただ、彼女と彼は少しばかりの縁がある。

「呪いの占い師消息不明？ふふふ、面白い記事ですわね」

「……………そうですね」

含みのある笑いを浮かべる朱乃に反して胡坐に頬杖をついて明後日の方向を向く八幡。朱乃とは“呪いの占い師”を活動していた頃よりの付き合い、コンビを組んでいた時期があった。短い期間故に、有名にはならなかったが、決して相性は悪くなかっただろう。学園で再開した時は色々あったが、既に昔の話。

コンビを組んでいても、彼女にはやや苦手意識があるのだ。だからなのか、一向に彼女の方を見ようとはしない。決して二つのメロンなど気にしてなどいない。見えそうで見えないスカートの中など気にしていない。反対に朱乃は八幡から視線をそらさない。それに他の人間に比べて態度が砕けている。

「暇そうなあなたにいいニュースがあるのだけれども」

「暇じゃないっすね。勝手に暇って判断しないで下さいよ」

「授業をサボってなに言ってるの、あなたは……………」

「調理実習でカレーを作る授業ですからね。数人でカレーを作るなんて愚の骨頂。カレーなんて一人でも作れます。むしろ、効率悪いでしょ。切つて、炒めて、煮込む。それだけで作れるんですから」

「ああ言えばこう言う……………」

昔はもう少し可愛げがあったと懐かしむ。数年前、よく彼にイタズラしていたのが懐かしく思えて仕方がない。それが八幡に距離を置かれる理由の一つであることは彼女自身も重々承知。そのオドオドした反応も楽しんではいるのだが。

「グレモリーの眷属にはならんからな」

「……………お見通しね」

つい口調が昔に戻ってしまう。朱乃の言おうとしていたことは分かっていた。何度も朱乃に誘われているも、断っている。

駒王学園の二大お姉さまの一人、リアス・グレモリー。かつて“呪いの占い師”として彼女を救った。正体は幸いばれていない。今は朱乃と他数名を眷属としており、冥界でも有名な御家。特に彼女の兄であるサーゼクス・グレモリーは冥界でも屈指の実力者。

「比企谷八幡は静かに暮らしたい。邪魔しないでくださいよ」
「あなたはいつから爆弾魔になったの？」

「見せるんじゃないかったと後悔する。」

「楽しいわよ。リアスの眷属」

「興味ないんですけど」

「女の勘が正しければ、八幡は巻き込まれる。いいえ、自ずとやってくる」

「俺がそんな人間に見えるかよ」

意味深な言葉を残して去っていく朱乃。誰もいなくなった屋上で八幡はぼそり呟く。

「……………女の勘、馬鹿にできないんだよな」

彼女の言葉に頭を悩ませていると、授業終了のチャイムが校舎全体に届く。教室に戻るなり、下賤な会話を広げる松田・元浜・兵藤の変態三人組。学園内でも悪評で有名である。一方で比企谷八幡は耳にイヤホンを装着しているので会話の内容までは把握できない。それでも、周囲にいる女子の視線で大方のことは察せる。そんな中で自分にまわりつく視線に不満を抱いていた。

「……………兵藤？」

これといった接点がない八幡に視線を向けていた正体は、変態三人組の兵藤一誠。

なにかした覚えもなければ、された覚えもない。彼の経験上話しかけると碌な目にならないので席につく。

「……………結局なにも起きねえじゃねえか」

あれから十数日、月が顔を出す時間帯。学校の帰りに本屋によってラーメンを食つての帰宅。高校生にしては贅沢をした。自転車をこいでふと鼻の奥をかすめる香りが漂う。過去に幾度となく、嗅いだ匂い。

「血の匂い……？」

平和なこの日本で嗅ぐの何時振りであろうか。嫌な予感がして、匂いの元を探る。

俺関係ありませんから俺関係ありませんから、そう自分に言い聞かせながら、言動に合わない行動をしている。嫌な気配がする一戸建ての前で立ち止まる。八幡が乗ってきたのとは別の自転車が1台置いてある。

中からは昔懐かしの匂いが彼の鼻をくすぐる。深いため息をついた。タロットカードを取り出すと、ひとりでにシャツフルされていく中で、一枚だけ彼の手にヒラリ落ちる。暗示された“隠者（ハーミット）”のカードを見て、諦めたような顔つきをしたと思えば、引き締まったような表情に切り替えた。

「こういう時だけ引きいいんだよな」

止まっていた足は自分の家のように他人の家に入り込んでいく。銃声が鳴り響く。光が射す一室には右手に光の剣、左手に銃を持つ狂人が足から血を流す兵頭一誠に襲い掛かっていた。彼も抵抗するが、一方的にやられているだけ。すぐ傍には新鮮な血にまみれた死体。(……)というか、兵藤がなんている。あの左手にある赤い籠手、神器じゃないだろうな、まさか)

開いた扉の前で冷静に分析し始める八幡には誰も気づきはしない。助けに入ろうか迷っている。見たところ、協会から追放された、はぐれエクソシスト。そんな奴にでも、ここで兵藤一誠を助けてしまえば悪魔側と認識されかねない。そうなれば、平穏な生活が崩壊しかねない。ここに来たことを八幡は後悔した。

「ぎゃあああああああー」

修道女。日本人ではない少女の悲鳴が響き渡る。アーシアと呼ばれた修道女は死体を見たからなのか、顔色が酷く悪い。はぐれエクソ

シストと修道女アーシアの2人の温度差に違和感を憶えた八幡。更にアーシアと兵頭はお互いの顔を見て驚愕の表情を晒す。そして、はぐれエクソシストとアーシアの間で口論が起こる。兵藤を庇う形で立つその姿に苛立ちが募っていくエクソシストは堪忍袋の緒が切れたのか、光の剣でアーシアの服を切り割り、壁に磔にする。

「アーシアを……………離せ……………!」

「なになに、俺と戦うの?苦しんで死んじゃうよ?」

勢いの一発をエクソシストに叩き込む兵藤。尻もちをつくエクソシストは凶悪な笑みを浮かべながらも怒っている。訳の分からない言葉を羅列して光の剣で兵藤に斬りかかる。与えられたダメージなのか、単に動けないのか、どちらにせよ兵頭一誠では対処しきれない。

「力(ストレンジス)!!」

頬に不意打ちの一撃。壁に激突するエクソシストはなにが起こったか分からなかった。この場所には自分とアーシア、兵頭一誠しかないはず。にも関わらず何故吹き飛ばされたのか。兵藤一誠は見開く。アーシアは何者なのか戸惑っていた。

「あんま好きじゃないんだけどな、これ」

「あなた……………誰ですかあ……………人間の宿す目ではないなあ……………」

額に青筋が浮き彫りになったエクソシスト。

「神器持ちの人間だ。目は気にすんな」

「ヒキ……………タニ……………どうして……………」

(どうしてじゃねえよ、ヒキタニなんて奴いないから)

「運悪く助けに来たんだよ……………しかも、タイミングも悪かったな」
突如出現する真っ赤に輝く魔法陣。

そこから続々出てくるのは剣を携えた木場祐斗。

かつて共に視線を潜り抜けた姫島朱乃。

もの静かな雰囲気を漂わせる駒王学園でも有名な搭城小猫。

そして、4人の眷属を使役する紅い髪のリラス・グレモリーが参上した。

八幡は真つ先に厄介なことになったという考えに行き着く。姫島朱乃と目が合った瞬間、眼を輝かせて彼女は俗に言うドヤ顔をしている。どうだ、言った通りだろうと言わんばかりに。

「よくもやってくれたね」

「……………え?」

現状を把握しているつもりで木場は八幡に剣を振り下ろす。とつさに躲したが、追撃態勢に入っていた木場。

「待てよ、木場。俺は敵じゃない」

「嘘を吐くな!」

木場との面識はない。なくとも、木場は女子からモテることでは有名なので嫌でも情報が耳に入る。

どうやら、八幡とエクソシストが兵藤一誠を追い詰めたと勘違いをしている。現状を打破するには面識のある姫島朱乃のみ。

視線を向けると綺麗な笑顔。それだけだ。

(楽しんでやがる……………!)

他の面子はエクソシストと相対し、なにやら話しているようだ。しかし、そつちに気を回す余裕は八幡にはない。

拳と剣の先端がぶつかり合う。

「中々やるね」

「嬉しくねえよ。俺は無実だ。なにもやっちゃいねえ」

「はいそうですかって言うത്?」

「そうかよ」

木場の鋭い剣技を裏拳で側面に当て、防御する。剣を持ち替え振り下ろすが、無駄のない最小限の動きで回避。そこから一方的に攻撃を繰り返すが、八幡にあたる気配はない。攻撃している側なのに焦りが生まれる。先ほどのように拳と切っ先がぶつかり合っても、八幡にダメージを与えられなかった。どころか、衝撃による痺れが手先から流れ込む。

「グレモリーの眷属はどいつもこんなに強いのかよ」

「嫌味にしか聞こえないね」

「これ以上続けるなら正当防衛で反撃するからな」

「そのままできてほしかったんだけどな」

強がりながらも余裕のある八幡に攻撃の手を緩めることはなかった。

「……………後悔すんなよ」

「ッ!!」

ようやく発した殺意に後退する木場。底知れぬ冷たい沼のような瞳で自分を映す八幡と相對するのに、恐怖を覚えた。動きを止めてしまふほどの重圧。死を覚悟した瞬間、

「そこまでですよ。木場くん」

まさに攻めに入ろうとしたタイミングで狙ったようかね割り込んできた姫島朱乃。

「彼は人間。敵じゃありませんわ、保証します。私の……弟みたいな子ですわ」

「そ、そうなんですか」

文句の一つや二つ言つてやりたいが、ややこしいことになる判断して口を閉じる。彼女の八幡に対する悪戯は今に始まったことではない。

「ごめん。てつきり墮天使側のエクソシストかと」

「……………いや、別に気にしてない」

木場が勘違いするのは無理もなかった。八幡の容姿、主に目の影響もあつたが、彼らが現れた時、八幡の立ち位置は傷だらけの兵頭の前になっていたのだ。それが相まってこのような結果を招いた。もつとも、それを止められた姫島は久しぶりの八幡の困った表情に歓喜していた。

「朱乃、裕斗。引くわよ」

リアス・グレモリーの言葉に展開された魔法陣に集まる木場と姫島。ようやく墮天使が襲来することに気付いた八幡はエクソシストが倒れている隙に“力(ストレンジス)”で得られた驚異の身体能力で家から出る。ここで修道女を助けてもよかつたが、墮天使の標的になる恐れがあるため、断念した。

「悪夢だ」

天命の札

「ちよつといいかな」

声の主は昨晚、八幡に刃を向けた木場祐斗。放課後、クラスの女子がやたら騒がしい原因は眉目秀麗である彼が原因。

「リアス・グレモリー先輩から呼び出しでね。付き合ってくれるかい」
「あー……悪いな、今日は用事があるんだ」

即座に厄介ごとであると察した八幡はよく耳にする有効な断り方をした。しかし、木場は八幡の言葉を予想していたように続けた。

「姫島先輩からの伝言があるんだ。来なかったら家に押し掛けるって」

「あなたは何者？」

カーテンが閉じられた薄暗い一室で兵藤一誠を除く、グレモリーの悪魔が集っている。ソファーに座らせられ、対面しているのは真紅の髪をしたリアス・グレモリー。

旧校舎の一室に連れてこられるなり、八幡への第一声がこれである。

「何者と言われましてもね。神器を持った人間じゃ駄目ですかね」

「朱乃からは古い知り合いって聞いたけど、信用出来るかどうか。素手で祐斗とやり合うなんて」

「どうやら姫島は彼が“呪いの占い師”であることは伝えてはいない。ありがたいが、当の本人は笑顔で楽しんでいる。

「昨日のは偶然居合わせただけです。兵藤を助けたんです、少なくとも敵ではありません」

「今は、そうかもしれない。私達を利用する可能性もある」

「グレモリー先輩は俺を利用する価値がある。まるでそう言いたいみたいです」

双方の沈黙。1分に満たない舌戦。相手の発言の裏を読む。互い

に触れられたくない部分があるからこそ、行われるのだ。彼女も八幡に神器はなんなのか問いただす馬鹿な真似はしない。

八幡が「呪いの占い師」であるを知っている姫島は心を震わせていた。数年前のように背中を合わせて戦う姿、イタズラに引つかかる姿、女子から受けた言葉にうちひしがれる姿、それが好きで好きでたまらないのだ。

なればこそ、是が非でも同じ眷属に引き入れ、また共に戦いたいと願うのだ。

この日はピリついた空気を残して帰宅する八幡。

「朱乃。彼は一体何者なの？」

「私の古い知り合い。そう言ったでしょう」

愉快そうに笑う眷属でありながら友人の朱乃が何かを隠しているのは、この部屋にいる全員が気付いている。本人も隠す気はないらしい。疑うわけではないが、やはり気になってしまう。特にやりあった木場は神妙な顔付きになっていた。無闇に人を殺しはしないが、自分のテリトリー。暴力で脅してもよかった。だが、タイミングが悪い。今は墮天使に集中したいし、木場と素手で戦った人間。なにかしらのカラクリはあるのだろうか。それでも、無傷では済まないと判断して帰させた。

帰り道、何故か兵頭に捕まった八幡は公園のベンチで肩を並べていた。

八幡 side

「アーシアを助けないんだ」

なんでそれを俺に言うの？

「部長達の力は借りられない。俺達は悪魔で、アーシアが神に仕える人間だからって。頼む！俺に力を貸してくれないか!？」

濁らない双眼が俺を捉える。

誰かを助けたいがために命を懸けるのか。それが実力と見合わずとも。

「断るに決まってるだろ」

「…………頼むーやばくなったら逃げてくれていい！」

地べたに頭をこすりつける兵藤の必死さは伝わる。だが、比企谷八幡である俺はそんな他人の為に頑張れるような人間ではない。勝手に俺が強いなんて決めつけるな。

身勝手な期待を押しつけるな。

「女なんて信じない方がいいぞ。お前が想ってるよりも残酷で嘔吐きだ」

幾度となく経験して得られた教訓。騙されに騙されぬいた、欺かれ笑いの対象となった俺は百戦錬磨の強者（つわもの）。故に女は信じただけ損をする。

「もう騙されてんだよー！」

頭を下げたまま声を荒げる。

「告白されてすっげえ嬉しくて舞い上がったよ！ 夢なら覚めないでくれって夜も眠れなかった！ 俺は……、変態だよ……。おっぱいが好きで女子からの冷たい視線受けても平気だよ。でも、あの子は、レイナーレはそういう目で見れなかったんだ」

ベンチに座っている俺からでも地面が湿っているのが見える。声が震えていた。

「絶対幸せにするって誓ったんだ！ 死んでって言われて、腹に穴空けられて、堕天使って知って、笑っていたんだ。死ぬことよりもショックだったんだ……………」

でも、続ける兵藤。

「アーシアは違う。悪魔の俺を体張って助けようとしてくれたんだ！ アーシアは純粹で騙されていたんだ！ 助けたいんだよ！我が儘でもなんでもいい！ アーシアを助けない、それだけなんだよ！」

「……………」

黙れた直後でも信じる。イカロスのような蛮勇と知っても動きだそうとする。頼る相手が俺と分かっているも……………」

「お前の都合なんて知るかよ。俺にデメリットしかねえだろ」

そう言っただけで公園から去っていく。

後ろからはただ一言。

「畜生……！」

ただ嘆く声だけが俺の中で響く。

第三者 side

駒王学園の女子生徒が2人、深い森の中に立っていた。存在感のある真紅と夜に溶け込みそうな漆黒の髪をした2人は、黒い羽根を広げる男女と対峙していた。

「うふふふ」

「機嫌いいわね、朱乃」

「ええ、嬉しくなっちゃって」

墮天使3人からそれぞれ攻撃が飛来する。それをあつさりど結界で防御し、雑談をする余裕をみせていた。

「あの比企谷八幡って子？ 神器くらい教えなさいよ」

「お教え出来ませんわ。彼怒っちゃうかも。……教えなくてもすぐに分かりますわよ、部長」

「……………」

姫島朱乃は視線を墮天使が住まう教会へ向く。彼女は予感と期待をしていた。後輩の兵藤を助けにいった先に彼がいた時点で確信した。

(ひねくれているくせに、優しいのよね。本人が聞いていたら、斜め下の回答をするでしょうけど)

必ず“呪いの占い師”やってくるよ。

そして、その予想は的中する。

教会の入り口を塔城小猫の小さな体で蹴り開くと、兵藤と木場は後にく。

教会内の唯一の光源は窓から差し込む月の光だけ。並べられた多くの長椅子。原型を保っていない石像。中央の最奥には砕けた十字と燭台。だだっ広い空間に響く3人分の足音を止めたのは、1人の拍

手。

「やあやあやあ。再会だねえ感動的ですねえ」

「フリード！」

陽気なように狂気を抱くエクソシスト、フリードが現れた。

「俺としては二度会う悪魔なんていないと思ってたんですよ。ほら俺、めちやくちや強いんで。一度会ったら即これよ、でしたからねえ」

ジェスチャーで首を切る真似をするフリード、そのまま、腰に装着していた銃に、柄のない剣を握る。柄からは光が宿り剣の形を成す。

「俺に恥じかかせたテメエ等クソ悪魔のクズどもがよお」

「アーシアはどこだ！」

「あー、悪魔に魅入られたクソシスターならこの祭壇から通じてる地下の祭儀場におりますですう。ま、行けたらですけどね」

『能書きの多い野郎だ』

フリードの前方、兵藤達の後方にはジーパンにフードで顔を隠した男が立っていた。暗さもあってフードの中が4人からは伺えない。声は変成器を使われているようで、知り合いかも不明だ。双方、敵ではないかと警戒し出す。

「だーれですかあ？」

『聞いたら何になんだよ。悪魔もまともに狩れないエクソシストが』

「あ？急にきてなんだてめえは殺されてえのか!？」

『行けよ、グレモリーの眷属。こいつは俺が相手しといてやる』

「……………」

「行かせるわけねえだろ！ここでミンチにしてやんだからよお……………つとお！不意打ちですか！」

『お喋りだな。コミュ力には困らねえだろ、羨ましいもんだ』

フードの男が右足で上段の蹴り上げを繰り返すも、銃を持つ左手で防がれる。

『行け、言いたいことあるんだろうが来てやった意味なくなるだろ』

「……………ありがとう！」

祭壇を蹴り飛ばした塔城は地下へと続く道を開く。塔城と木場は疑惑を抱えつつも、兵藤に続いていった。

「邪魔してくれただじやねえの」

『その割にはだんまりだったじやねえか』

「つたりめえだ！ 標的はテメエに変更だかな！」

歪んだ笑みで右手に持つ光の剣でフードの男を斬りはらう。フードの男は上半身を退け反らせ躲し、続く銃弾はアクロバティックに後方へ回転しながら椅子の陰へと隠れる。フードの男こと比企谷八幡は浅く息を吐く。銃声が止むと、足音が一つだけ。それに気づいた八幡は真上で剣を振り上げたフリードを見上げる。

「みくつけたっ！」

『チツ』

タロットカードを宙で並べると回転を始め、フリードはすぐに八幡の正体を見抜く。

「ほうほうほう！ まあさか」呪いの占い師「さんでありますかあ。墮天使、はぐれ悪魔を狩る賞金稼ぎつつう金の亡者！ 天使って噂も聞きましたが悪魔ですたあねえ」

『悪魔じゃねえよ。人間だ』

「どちらにせよ、悪魔の味方したんだ、肅清対象ですよ」

『出来るんならな。女帝（エンペランス）』

「んだあ！」

様々な彩り溢れる宝石が輝きを放って八幡を中心に出現。宝石は月の光が反射されているのではなく、蛍のよう一つ一つが内から煌めいていた。

問答無用で引き金を引くフリード。しかし、宝石の衛星は銃弾から八幡を守り、輝きを増していく。

『三流じゃ話にならねえ。見逃してやるから出直せ』

八幡の“天命の札”はタロットカードを元にして作れた神器。

22枚で構成されたカードにはそれぞれ能力が宿っており、引いたカードの能力を使用出来る神器。これだけ聞けば、状況に応じた対応が可能な最強の神器。

しかし、“天命の札”の最大リスクは自分でカードを選べない点である。引くカードは毎回ランダム。しかも、制限時間付きで多少の誤

差がある。いいカードを引いても制限時間が訪れ、また引いたら最悪なカードというケースもある。引いたカードはキャンセル不可。

故に酷く使い勝手の悪い神器。

八幡は全てのカードを使いこなしているが、得意不得意のカードもある。中には引いてはならない最悪のカードも存在する。今回引いた“女帝（エンペランス）”は可もなく不可もない防御よりなカード。制限時間も比較的長い方だ。宝石を自在に操って戦うことが可能。更に八幡は“天命の札”のリスクを上手く隠している。これだけでそれなりのアドバンテージが取れる。相手からすれば脅威であろう。「舐めてくれるじゃねえですか」

正面から止まない銃撃は宝石により防がれる。それを意に返さなくことなく宝石の衛星を光の剣で弾いて、八幡へと突き進んでいく。「神器だよりの人間。悪魔ならいざしらず、ただの人間が俺に敵うかよおー！」

『馬鹿か、お前』

安い挑発に乗ったフリードが突き進むのは女帝の結界の内側。一つの野球ボール程の宝石が急速に回転する。それに気づかないフリードが横を通った瞬間、わき腹に宝石がめり込む。

「……………お……！」

咄嗟に進行方向へ転がって結界の内から出る。笑いながらも顔を歪ませ涎を垂らしてあばら骨の辺りを抑えている。

『神器はお前の足りない脳みそじゃ理解できるもんじゃねえ』

そこへ次々と色彩溢れる宝石群がフリードへと飛来。ダメージを負いながらも、宝石を回避。壁に激突し破壊しても、墮天使が使っているだけの廃墟。遠慮などない。フリードの反撃と言えば銃撃だが、八幡にとって恐怖の対象ではない。とうとう追い詰められたフリードに笑みが宿った。

「こりゃ……………分がわりいや」

武器をしまおうと懐から取り出した煙幕で視界が遮られる。煙が晴れるとフリードはいなくなっていたが、特に追う気のない八幡は大小がばらつく宝石の衛星を漂わせて、逃げたであろう窓を見つめてい

た。それもすぐのことで、数ある長椅子の一つに腰を落ち着かせる。変成器とフードも外して素顔を露わにした。

「ふいー。神器なしにしちゃあ強かったな。……………ん？」

地下から人の気配を感じ、体勢を低くして隠れる。“女帝（エンペランス）”の制限時間が訪れ、寶石は消え去る。八幡がここに来た理由は兵藤一誠による成果である。場所を伝えたのは別の人物。現状と彼の人間を考慮すれば一人しかいない。しかも、場所だけでなく他の注文も加えていた。

（注文の多い料理店かよ）

地下から出てきたのは、シスター、アーシア・アルジエントを抱えた兵藤。アルジエントの様子を見てすぐに分かった。

（神器が、抜かれたのか……………？）

三白眼を見開き、小さく舌打ちをする。フラッシュバックする呼び起こしたくない過去。彼の“天命の札”は本来彼のものではなく、本当の持ち主がいた。その過去は昔コンビを組んでいた姫島でさえも、ほんの一部しか知らない。

兵頭は涙を流してアルジエントになにか訴えかけているようだが、アルジエントは涙を流す兵藤に言葉を残して目を閉じた。ここで八幡は姫島から送られてきたメールの一文を思い出す。兵藤一誠が戦う時は手を出すな、そのようなことが載せられていた。

（あの女狐のことだ、なにかしら意図があんだろ）

現状を見守ることにした八幡は息を殺して時間の経過を待つ。地下から3人目が墮天使レイナーレが顔を出す。アルジエントの神器を奪ったレイナーレとの口論の応酬が始まる中で、兵藤の左手に神器が装着される。肉弾戦でしか戦えない兵藤の拳はレイナーレに当たることがはない。翼のあるレイナーレは空を飛んで、左右の太ももに悪魔にとつて毒である光の槍を命中させ、機動力を奪った。

しかし、異変が起きた。少年が二度目の涙を流すと神器の形状が変化する。見た目だけではない。徐々に兵藤一誠の力が増していく。それにはレイナーレも動揺を隠せない。攻撃を試みるが、赤い籠手に弾かれ即座に去ろうと翼を広げたレイナーレの足首を掴んだ兵藤は

彼女を殴り飛ばした。

(あの神器……赤龍帝の籠手？なににせよ、厄介なことになりそうだ)

惰性を信念に去ろうとするも、リアス・グレモリーの眷属が続々と現れ始める。完全に教会から出るタイミングを失っていた。姫島の策だと悟った八幡は頭の中が一瞬だけ真っ白になる。冷静さはすぐに取り戻し、どうやってこの場から去ろうか思索する。

①下手に強行突破でさろうとしても、余計に怪しまれるだけ。最後の手段。

②去るまでじっと待つ。姫島朱乃が忘れていなければ。

③“天命の札”で隠者を引き当てて去る。確率低し。

選択肢を考えながら変成器とフードを装着。しようとした。

後方から殺気が飛んでくる。飛びのくと、剣を振り下ろしていた木場の姿がそこにある。

「君は………！」

レイナーレはリアス・グレモリーの手によって滅され、アーシア・アルジェントは転生によって復活を遂げる。そんな出来事は八幡にとっては些細な問題。何故なら、グレモリー一派の視線が彼一人に向けられたからだ。現在は素顔を晒している。無論、偶然を装うのは不可能だ。服装も1年生1人と2年生2人に会った時と同じ格好をしているからである。

「………どうも」

観念したのか、両手を上げる。降参の意思表示する。

「全部話すんで勘弁してもらえませんか？」

「うふふふ」

その一言で笑い声上がる。見事彼女の術中にはまった八幡は怒る気力もない。もはややれることは我が身が無事であるように祈ることだけだった。

選択

Z

「紅茶ですわ、呪いの占い師さん……ぷふっ！」

授業は終わり、生徒たちは教室に残って雑談するなり、部活で青春の汗を流すなり、職員室に呼ばれるなり、至って平和な日常を送っていた。

旧校舎のオカルト研究部の部室では、グレモリーの眷属に主のリアス・グレモリーが集結していた。そこに込み上げる笑いを漏らす姫島朱乃の湯気が立つ紅茶を一口、味わう八幡。

入室してから声を出したのは、姫島の一言だけ。

兵藤は悪魔になってから日が浅いので“呪いの占い師”の名は知らない。反対に木場と塔城は“呪いの占い師”の逸話を聞いていた。

魔王と同等の実力者。法を犯した上級悪魔と眷属を打ち倒す。尾ひれはついても、事実となる元はある。

この場において八幡を除けば、一番動揺しているのはリアス・グレモリーなのかもしれない。過去、窮地に立たされた彼女を救ったのは、“呪いの占い師”。それから“呪いの占い師”のファンで切り抜きを取っている。その存在がソファアで座っているのだ、落ち着きを見せるので精一杯。それどころか、昨日は一睡も出来ず、授業も上の空。

そもそも呪いの占い師である比企谷八幡がここにいる理由は昨晩の出来事が起因する。

教会で墮天使側の人間と勘違いされ、木場に襲われた時にバレてしまった八幡は、観念して降参する。

そこでリアス・グレモリーは目を細め、問いかける。

「あなたは敵？」

「いいえ。グレモリーを敵に回したくありません。今回はエクソシストの相手をしたんでそちらの3人が証明してくれます」

3人を見やると首を縦に振る。彼女の警戒は緩まず、塔城小猫と木

場祐斗も何時でも対処出来るようにしていた。

「そのはぐれエクソシストはどこに?」

「逃げられました」

追う気がなかったとはいえ、嘘は吐いていない。八幡もいつ敵と認識されかねないか焦っている。1人だけ楽しんでいる者もいるが、視界に入れない努力もしていた。

「残念ね。いえ、都合がいいと言うべきなのかしら」

「ここで信頼を得て、あなたを背中から刺すと思つてんですか?」

「十分考えられるでしょ。他に違うと証明できるものはないの?なければ、敵と認識させてもらうわ」

嘘か真かさだかではない。が、左手に攻撃の意志を表す魔力が宿る。

「そんな……部長! ヒキタニは俺達を助けてくれたんですよ!」

「お黙りなさい! 神器を持った人間なんてそういるもんじゃないの。それをひた隠しするなんて怪しすぎる」

「……木場も! 小猫ちゃんもなんとか言えよ! ヒキタニがいなかったら……!」

ヒキタニじゃねえよ。そう内心呟きながら、八幡は一步步寄り、タロットカード“天命の札”を取り出す。

「……………え……?」

見覚えのあるタロットカードに目眩を起こし、記憶の狭間で助けられた時に眼に映されたタロットカードと一致。

宙に並ぶタロットカードは回転し始め、八幡の手に一枚。

「星(スター)」

粉状の金色の輝きが八幡に綿毛さながら舞う。足は地面から離れ、悪魔や墮天使とは違い、翼もなく宙に浮く。

「……………うそ……」

リアス・グレモリーは口を手で塞ぎ、足をふらつかせる。

「世間じゃ呪いの占い師なんて呼ばれてますけどね。自分で名乗ったわけじゃありませんからね、一応」

「私が証人です。これの目を見て信じられないかもしれませんが、間

違いありませんわ、部長」

(どうもこれです。目は関係ないだろ。確かに目で呪われそうだってネタにされたけど。女ってどうして呪いとか好きなんだろうな)

ふと忌まわしい過去を振り返って陰鬱な気分には陥っていると、木場が剣を振りかぶっている。

右足を柄の先端にぶつけ静止。そこから低空飛行で木場の足下をすり抜け、背中を蹴りつけた。体勢を崩した木場をフォローするように跳び蹴りをする塔城。

「星(スター)」の特性を活かして飛び上がる。そこへ地上から伸びた電撃。出どころはリアス・グレモリーの傍にいた姫島朱乃。それも旋回して回避する。

「茶番は終わりですか、姫島先輩」

「ええ、これで名を語る偽物ではないと証明されましたわ。ねえ、部長？」

「…した……明日、祐斗を向かいに行かせる」

リアス・グレモリーはそれだけを言っただけで去っていく。眷属達もそれに従い、教会に残ったのは八幡だけとなった。

そうして、オカルト研究部の部室に歓迎された八幡。気持ちの整理が落ち着いたのか、リアス・グレモリーは切り出す。

「まずは昨日の件の謝罪と感謝を。無礼な態度でごめんなさい。力を貸してくれてありがとう」

「お気になさらず」

「今回の本題は別にあるの。この際、あなたがどこの派閥につきようが構わない。けど、神器を使いこなす人間を放置するわけにはいかな
い」

「ようするに?」

「部長の眷属になるというわけですね」

手に頬を当てて笑みを向ける姫島。

「いいえ、監視させてもらう」

「ええッ!？」

これには驚いた姫島。彼女はすっかり眷属に出来うると想っていたらしい。

「呪いの占い師”に必要な駒は恐らく5個以上。足りないわ」

眷属悪魔になるのには、特殊なチエスの駒が必要。兵藤に8個分。姫島、木場、塔城、ここにはいないがもう1人に使用している為に絶対的駒の不足。

「監視とは具体的に？」

そんなうなだれる姫島を無視。集団行動苦手とする八幡は眷属になることを回避できても、油断することなく警戒する。

「そうね。とりあえずオカルト研究部に入ってもらおうかしら。放課後に活動するから来て貰おうかしら」

「放課後とかバイトしてるんで参加できません」

「3日前の面接サボりましたわよね」

「なんで知ってんですか？アケペディアですか、あなたは」

入部と聞いて立ち直った姫島。兵藤とアルジエントもよくわからないといった様子、木場は嬉しそうで、塔城の表情からはなにも読み取れない。

「拒否したらどうなるんですか？」

予想はしていた質問。しかし、答えを用意できたわけではない。他の人間ならともかく、数々の戦場を潜り抜けてきた”呪いの占い師”には生半可な脅しは効かない。が、意外にも片付きそうな気配になった。

「私が彼の家に住み込みで監視するのはどうでしょうか？」

「悪い冗談はやめてくださいよ」

突拍子もない発言をする姫島。苦い表情を浮かべる八幡。ここにいる全員が2人の関係がなんなのか改めて気になる。しかし、談議は中止された。オカルト研究部の両開きの扉がノック、姫島が返事をすると眼鏡をかけた少女を先頭に入室してきた集団。

「失礼します」

「こ、このお方は……!」

兵頭とアルジエントは驚きを、八幡は顔をしかめる。それ以外は驚きも見せない。

駒王学園生徒会長。支取蒼那。その後ろにいるのは、同じく生徒会の面々。

「お揃いでどうしたの?」

「お互い下僕が増えたことだし、改めてあいさつをと」

「下僕って……!じゃあ支取先輩も悪魔!」

ソーナ・シトリー。シトリー家の次期頭首。こちらでは支取蒼那と名乗っている。生徒会は彼女の眷属。彼女の家はグレモリーにも勝らずとも劣らない権力がある。

「リアス先輩、僕たちのこと話してなかったんですか?同じ悪魔なのに気づかないこいつもどうよって感じですが」

生徒会長のシトリーが傍にいた男子生徒をいさめ、紹介した。

「匙元士郎。ポーンです」

「ポーンの兵藤一誠。ビショップのアーシア・アルジエントよ」

「へー、お前もポーンか!それも同学年なんて」

嬉しそうな兵藤であるが、匙は嫌味を吐いて駒を4つ消費したことを自慢げに話す。それもすぐのこと、シトリー会長から兵藤が8つ消費したことを知らされる。それからのやり取りで似た雰囲気を持つ兵藤と匙の仲は悪くなるだけであった。

「あ、ところでリアス先輩。そいつは誰なんですか?」

匙はソファアで傍観している八幡を見る。匙の疑問に答えたのはリアス・グレモリーではなく、主であるシトリー生徒会長であった。「比企谷八幡。冥界では“呪いの占い師”で名が通っているわ。私とリアスを助けてくれた恩人でもあるわ」

「あなた、正体知ってたの?」

2人の恩人であるというのは姫島以外は初耳であったため二つの眷属から視線が集中する。この学園で八幡の正体を知っているのは2人だけであったのが、一気に急増。ここでシトリーに抱えていた疑問を投げかけたのは、一度手合わせをした木場。

「“呪いの占い師”は魔王と同等の実力という噂を聞きましたが、本

「当なんてでしょうか？」

八幡と戦った彼は今日まで疑問にしていた、その回答が聞ける。これには皆、胸を高鳴らせている。

「さあ、どうかしら？あなたも知っているでしょうけど、彼の神器は強いカードもあれば弱いカードもあるから。実力なんて曖昧なの。でも、神器がなくても対策はとっていたわね。神器なしで手合わせして互角だったわ」

「ソーナ。あなた、彼と手合わせしてたって……」

「成り行きですよ。どうも、お久しぶりです」

リアス・グレモリーの話を遮り、シトリーの前まで歩く。夕闇に溶けこみそうな瞳に生徒会面々は警戒する。それが誤解を招くことを分かっていたソーナは右手を上げて制す。

「背は伸びても目だけは変わりないわね」

「アイデンティティなもんで。覚えやすいでしょ、社会は俺みたいに個性あふれるオリジナリティな人間を求めてるでしょ」

「そうね。その成果のおかげでうっかり110番しそうになってしまったわ」

「人を犯罪者呼ばわりしないで下さいよ」

「あら、違ったかしら。指名手配されてそうな目つきだったから。矯正をお勧めするわ」

「そこまですよ」

八幡とシトリーの会話を遮るリアス・グレモリー。雑談が長引きそうなので間に入る。その判断は正しく、このまま進んでいけば昔話に突入していただろう。

「ソーナ。本題はなにかしら？」

「失礼。彼を引き抜きに来たの」

腕を組んだ状態で人差し指を向けた先は比企谷八幡。

「横から人の物を盗ろうなんてどういう見かしら？」

「盗ろうだなんて馬鹿な真似しないわ。そもそも、彼はあなたのものではない。部員でもなければ、眷属でもないでしょ」

「私の使い魔ですわ」

「姫島先輩少し黙って下さい。支取先輩、グレモリー先輩。俺は悪魔やら天使やらとはもう関わりたくないんですよ。昨日のは運です偶々です」

「神器持ちの人間を見ず見す逃すと？」

リアス・グレモリーが目を細めて笑う。過去のことも昨晩の件もそうだが、いつか必要な駒になると確信しているからだ。

「勘弁してくださいよ。悪魔だの天使だの、そんな世界から抜きたいんですよ」

2人の頭領は笑う。

「私につけば悪いようにはしないわ」

「悪いけど、私には夢があるの。わがままに付き合ってもらおうよ、占い師さん」

美女2人に迫られるのは悪い気はしないだろうが、八幡にその心配はない。ましてや、笑みこそ見せていても、双方からの有無を言わせない圧迫感。ジレンマに陥り、姫島に救出の視線を送るが、親指を立ててウインクするだけであった。

「そそうでひゆね。今すぐってわけにもいきませんので、じい時間ください」

目を合わせたら終わる。声を震わせ、勇気を振り絞って出した言葉に納得な様子をみせていた。

「それもそうね。今すぐ決めろっていうのは無理な話よね」

「私としたことが。で、何時までに決めるの？5分10分？」

短い。普通であれば1日、長くて3日だろう。ところが、八幡の思考がある程度読めるシトリーは、みんなが忘れるであろう適当な日にちを決めてフェードアウトすると踏んでいた。実際、それは当たっているようで、目を泳がせている八幡は声も出ない。

「ええええええつとですね」

ここまで来てようやくどちらに着くかの思考をフル回転する。メリットとデメリットを軸に、そこから両方の家柄立場、冥界のことはある程度の知識がある。

持てる知識

捻じ曲がった価値観

濁ったたレンズを通した世界

自分を知る女2人

過去の因縁

全てを天秤に架け、結論にたどり着く。

「オカルト研究部！オカルト研究部にします！」

動揺で必死になって発した裏返る声。

コンビ

「ども」

オカルト研究部に決めた後日、木場と兵藤に連れられてオカルト研究部に直行した。シトリーはあっさり引き下がり、眷属を連れて去っていった。特に深くは考えず、帰された。

「いらっしやい、八幡」

出迎えの挨拶は部長のリアス・グレモリー。年上特有の母性的な笑みを向けられ、ふいつとあらぬ方向へ目を背ける。

(あつぶねー。うっかり惚れて振られちゃうとこだったよ)

「改めてよろしくね。私は3年のリアス・グレモリー」

「うす」

「1年、塔城小猫。比企谷先輩よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

「アーシア・アルジエントっています。この間はありがとうございます
ました」

「いや……、礼は兵藤に言っとけ。俺は言われてきただけだ」

「？」

「次いくよ。同学年の木場祐斗。また手合わせ願いたいな」

「運がよかつたらな」

「兵藤一誠だ。よろしくな、比企谷。この前の礼言いそびれちゃったな。ありがとう」

「気にすんなって。あー、その、なんだ、シエルブリットって知ってるか？」

「シエル、ブリ……なんだそれ？」

「あいやなんでもないんだ。忘れてくれ」

どうでもいいことであるが、兵藤の神器を見た八幡はあるアニメを思い出し、興奮していた。

「では、私が最後になりますわね」

「いらないでしょ、姫島先輩は」

「そう言わずにやらせてくださいまし。ね?」

「……………好きにしてください」

「3年の姫島朱乃。スリーサイズは「あ、もういです。よろしくお願ひします」……………」

別段、頬を染めるわけでもなく、あしらうように頭を下げて部長に向き直る。その姿に不満を覚え、ドツキリを画策する。兵藤は姫島のスリーサイズが聞けると期待したので、肩を落としていた。

「自己紹介も終わったことだし、今日の本題に入ろうかしら。はぐれ悪魔の討伐。一誠のときは色々と説明したけど、八幡は理解してるわよね」

「そうですね。冥界で生活してた時期ありましたし」

「今回のはぐれ悪魔は徒党を組んでいるらしいの。決して油断しないで欲しい」

リアスの言葉に合わせるように姫島は建物の地図らしきものをテーブルに広げる。

「潜んでいる場所は5階建ての廃ビル。数は5体。八幡には悪いけど、いきなり戦ってもらうことになるわ。イツセーは油断しないで頂戴。アーシアは基本的に誰かの傍にいて、…………イツセーがいいかもね」

入部して日の浅い3人に注意と指示を送るリアスの表情は真剣そのもの。

「状況に応じて単独行動していいんですか?」

集団行動が苦手な上にカードによつては周囲を巻き込む可能性があるある彼にとつて、誰かと共に戦うのは足の引っ張り合いになりかねない。

「駄目よ。あなたは監視される立場にある。その自覚を忘れないで。あなたは私か裕斗か小猫が付くわ」

ここで姫島の名が上がらなかつたのは私情を挟ませないためである。それに対して不満を抱くことはない。学生の立場にある彼女等に任せられる程度の仕事。自分がなにかしなくとも監視にある者が動いてくれるだろうと、心底舐め腐った結論に行きつく。八幡にとつ

て都合のいい展開になっていく。

「承知しました、部長」

「あとは時間まで好きにして。私はアーシアと八幡にオカルト研究部の説明しなきゃ」

「部長、話が終わったら彼を借りてもよろしいでしょうか？」

木場と塔城が並んで部長であるリアスに頼み事をする。2人揃ってのたのみごとはどうやら、珍しく二つ返事で了承する。しかし、八幡の許諾は得ていない。

説明は簡単にまとめられたもの。ある程度は冥界での知識で事足りうる。問題は依頼と監視。監視は現在進行形で行われているので今更気にするほどのことでもない。彼にとつて重要なのは依頼。魔法陣を利用して依頼者の手助けをする。座右の銘は働いたら負け。元気は失くす一方で、グレモリーはため息を吐いていた。結果、しばらくは依頼でも監視が付く破目になる。

「いきなりでごめんね」

屋上に呼び出した木場と小猫。木場の手に2本の木刀。

「新人いびりか」

「そんな物騒なもんじゃないよ。手合わせ願いたいんだ。学園内だから神器使えないからこれでね」

「塔城もか……………」

「はい」

「物騒じゃねえの」

投げ渡された木刀をキャッチした瞬間、ゴングもなく木場に打ち込む。反射的に反応した木場は白い歯を見せて、鏢競り合いに持ち込む。力は互角なのだろう、微動だにしない2人は目を離す気配は見られない。その間、塔城は手を出すことなく見守っていた。

「なんだ、2対1じゃないのか」

「安心しなよ、不意を突くような真似はしないから、さっ！」

ここで体勢を崩しに掛かり、木刀を押しすようにして上半身を前に倒す。左足を下げ、よろめく八幡に木刀を振り下ろす。が、培った剣術の勘のお陰なのか腰を引かせる。

腰があつた軌道には木刀が通り過ぎていた。

「別にいいぞ、2人掛かりでもよ」

「安い挑発には乗らないよ」

「そりやよかつた。二人同時は辛いからな」

「よく言うよ。これでもショック受けてるんだけどな。剣を本職の僕と互角なんだから」

「そうかよっ」

脳天に振り下ろされた木刀の側面を弾き木刀を捨てる。左手で胸倉を掴んで、右手で木場の右手を握り締め背負い投げを決める。木場は背中をコンクリートに叩きつけられることなく足で着地してダメージを失くす。八幡の首には最後まで離さなかつた木刀が突きつけられていた。

「お見事」

「神器なしでも動けるんだね。今晚が楽しみだ、君の戦いが見れるんだから」

「よせよ。争いは嫌いな平和主義者だ」

「戦わざるをえない状況にすればいい」

「爽やかな面して怖いこと言うな、悪魔かよ」

「お褒めに預かり光栄です」

どうやら彼にもユーモアがあるようで笑顔で立ち上がる。腰に手を当てて夕日に照らされる姿は様になっていた。

「次は私です」

「もう終わりにしない？今日討伐あつから、体力残しとかないと」

「もーまんたい」

小柄な体で跳躍。高さは八幡の身長を優に越え、風車を連想させる回転で踵落としを仕掛ける。少女の下着の色を判明したが、考える余裕はない。冷や汗を掻き、蹴りで流れた風圧がどれだけの威力を誇るか、経験で把握した。右半身を下げ、踵落としを躲す。焦っても動きに無駄はない。観戦に回る木場はじつくりと2人の戦いを楽しむこととした。壁に寄りかかろうとすると、扉が開きリアス・グレモリーと残りの眷属が揃う。

「部長」

「祐斗、もしかして負けちゃった？」

「辛勝、といたったところですかね」

「マジかよー！比企谷って強いんだな！あ、でも神器なしだからか」

「いいえ、神器なしでも祐斗と剣でやりあえる人間はそうはいないわ」
ギャラリーが増えたのは八幡も塔城は気付いているが、相手する余裕はなかった。八幡はとにかく攻撃を避けることに専念。実力は木場と同等なのだろうが、馬鹿力と人間の力で殴り合いっこは厳しい。焦りは消えていき、ただ冷静に反撃のチャンスを探っていた。突き出された右からの足刀、足首を掴んで関節技を組む前に、掴まれたことを利用して左足からの蹴りが頬をかすめる。

「つぶね」

表情を顔に出さないだけ冷静かつ、判断力が素早い。そうして屋上の端に追い込まれ、淡々と拳を突き出す塔城。ふと視界が暗く、嗅ぎ馴れない匂いに包み込まれる。疑問が晴れる前に、後ろに下がって危機を回避。

視界を塞いだ正体は八幡の制服、右手には先程の投げ捨てた木刀。

「……………くくく」

あくどい笑み。眉をひそめる塔城。彼の表情に悪魔より悪魔らしさと感想のギャラリー。それとは裏腹に両手を上げる。

「ギブアップ」

「……………ふざけないでください」

「ふざけてねえよ。このままやりあっても俺に勝ち目はない。そんなけだ。それに、」

完全に戦う気のない八幡は塔城の横を通り過ぎて、木刀を木場に返した。

「帰って準備しなきゃいけないからな、色々。部長、一旦帰ります。すぐ戻ってくるんで」

「準備って？」

「神器だけが能だと思ってますん？」

弱点を放置するわけのない彼の武器はなにも“天命の札”だけで

はない。“隠者(ハーミット)“や“恋人(ラヴァーズ)“などといった戦闘では役に立たないカードの対策は立てられている。神器ほどではないにせよ、それなりに戦うことも可能で神器と組み合わせて戦うことも可能。今夜は戦う気はさらさらない。用意するのは形だけでもやる気を見せなければという判断からくるものだ。

一人、校内を歩き、シトリーと鉢合わせる。特別話すこともなく、横を通り過ぎる。

「いつでも生徒会に来てもいいのよ」

一言余裕な様子で吐き出された言葉が嫌にのしかかる。

「アーシア、離れちゃ駄目よ」

「はい！」

廃れたビルに人の気配はない。空には三日月がグレモリー眷属を照らす。張り詰めた空気、八幡の腰には学園にいた時にはなかったものが取り付けられている、拳銃が納められているガンホルダー。無論、弾丸は鉛玉ではない。冥界で製造された特殊性。危ないので安全装置はやったままである。

「それが君の武器だね。“魔剣創造(ソード・ベース)“、持ち主の思い描いた魔剣を瞬時に産み出す。これが僕の神器さ」

(ええー、なにそれチートじゃないですか。限度はあるんでしょうけど、俺の神器より使い勝手良さそうだな)

過去に魔剣使いとやりあったことを思い出し、寒気がする。一同は廃ビルに入っていく。内側は外観通り、殺風景でなにもない。

「やべえな」

「え?」

八幡の呟きがアルジエントの耳に届いていた。同時に廃ビル全体に結界が張られ、入り口が塞がれる。戦闘慣れた4人は動じることなく、戦闘態勢に突入。兵藤も焦りながらも、左腕に神器を装着。

「部長ー!どうなってるんですかこれ!」

「畏ね。私達は嵌められたのよ」

2階から50を超える集団がやってくる。

「グレモリーのご息女がこのようなところでなにをされてるのでしょうか？」

「お掃除。ここは汚れが酷いっていうからやってきたのよ」

オールバックの男が芝居がかった話し方で胸に手を当てる。挑発で返すリアス・グレモリー。

男は鼻で笑うと、人間ではありえない犬歯だらけの牙がアルジェントを震えあがらせた。

「ワーウルフ。ここにいる連中は」

集団は全身から体毛を生やし、骨格に変化を起こす。爪も伸び切り、耳に届く口からは涎が垂れている。ワーウルフの集団は焦げ茶の薄い体毛を全身に生やす。敵の頭領である男はポケットに手突っ込み、煙草を吸っている。

「狼男。噛まれた人間は狼男の仲間入り。悪魔は大丈夫なんですか？」

「悪魔は大丈夫でしょうけど、八幡は人間でしょう。それに狙いは部長みたいですね」

「リーダーの男は別格よ、強いわ」

「食らえ」

状況整理する余裕は与えられない。ワーウルフの群れは一斉に飛びかかる。50の獣の軍勢が押し寄せる。その身体能力は人間のそれを上回っている。

先制攻撃は意外にも八幡。ホルダーから拳銃を抜く。安全装置を外す。瞬時にこの動作を行い、10時から2時の方角から跳びかかるワーウルフ5体に1発ずつ撃ち込む。空中で撃たれた5体の傷は浅くワーウルフの生命力であれば、まだまだ動ける。

「うがうああー」

飛来する雷撃。落雷を思わず痺れは一瞬で死を誘う。他の4体にも同じ現象が起こり、煙を上げる黒こげの死体が五つ転がる。“呪いの占い師”と“雷の巫女”の昔から使う戦法。八幡が持つ弾丸は2種類。一つは単に威力が高いもの。もう一つは、避雷針の役割を果たす弾丸。

八幡とコンビを組み始めた時代、姫島の魔法は攻撃力も命中精度も未熟も未熟。考え抜いた打開策が特殊な材質を加工した弾丸である。的が多少ズレていても雷は弾丸を追い、材質の影響で威力の向上に成功した。作れるまで、時間と金を浪費した。これを作れるのは冥界でも二人だけだ。魔力の消費にもなるので、既に子供の域は超えていた。

あれから成長した姫島は威力を重視させて、雷を当ててみれば2人も予想以上の威力を發揮していた。

(全て胸の真ん中……)

気付いたのはリアス・グレモリーののみ。八幡が狙ったのは全員、胸の中央。正確無比の射撃は“雷の巫女”の実力を一層高める。打ち合わせなしでの連携には、眷属同士でもあまりない。

早くも仲間が5体も死んだことに動揺した集団は踏みとどまる。その隙を逃さない塔城は近くにいたワーウルフの顎を蹴り上げ、腹部に何発も拳を打ち込む。我に返った別のワーウルフは攻撃の隙を狙い襲い掛かる。それに気づかない彼女ではなく、噛みついてくる顎を掴んでコンクリートの地面に叩き付けられた。

「思ったより弱いな」

剣を生成した木場は急所を躊躇なく狙う。獣の体毛は硬いと聞かすが、木場はなんてことないように己の剣で切り割く。腕を切り落とし、そのまま首を跳ねる。

兵藤はなんとか神器を利用して奮闘しているが、戦闘経験も浅いで1人も倒せないのが現状。それをフォローしているのが、姫島と八幡。リアスは手を出さず、ただ2人の動きを観察していた。こんな数があると聞いてなかった八幡は渋々戦う。姫島は正反対で、楽しそうに雷撃を振り散らす。その姿に引いてるのは八幡だけでなく、親友のリアスも一歩引いていた。

「やるじゃないですか。グレモリーの皆さまよお」

全て屍と化した頃、頭領の男は階段の踊り場で拍手を送る。焦るところか、こうなることを予想していたかのようだ。

「降参するなら今のうちよ」

「三下片付けただけで調子乗んなよ」

男は上半身の服を脱ぎ捨てる。脱ぎ捨てられた服は踊り場から一階の床に落下。だが、そんなものに気にする余裕はない。彼から目を離すこと許されない。

人間の形をしていた男が奇妙な姿へと変貌していく。鍛えられた筋肉質の上半身は、先程まで相手していたワーウルフの体毛とは異なり、茶色ではなく艶のある黒。腕、首、足、顔にまで体毛で覆われていく。口からはみ出す白い牙列。瞳は金へと変色。その瞳は肉食獣そのもの。

「フハハハハハハハ！」

真の狼男は笑い声を上げる。

「ギリアムってんだ、よろしく！」

「しない」

即座に動き出す塔城。腹部に肘鉄を打ち込む、更に蹴り、グローブをした拳を一発一発全力で叩き込む。

「うっ!？」

「効くねえ」

言葉とは裏腹に舌舐め擦りして塔城を見下ろす。攻撃したはずの彼女の方が痛みの声を漏らす。小柄に見合わぬ怪力はギリアムと名乗った男の頑丈さに敗れ、攻撃した手足を逆に痛める。顔をしかめ、味方の元へ下がっていく。

「かなり硬いです……………」

「みたいね。何者かしら？」

(ワーウルフでギリアムっていったら、前科50越えの犯罪者か)

数年前の記憶を掘り起こし、額の高い男をようやく思い出す。目はつけていたが、結局叶わなくなってしまった。

「私と朱乃と八幡は後方支援。イツセーと裕斗と小猫は接近戦を。アーシアは私達の後ろに」

3人は各々の武器でギリアムへ近付いていく。ギリアムは口角を上げ、一階の天井に跳躍。そこから更に壁へ跳躍。壁から壁へ、そうかと視認すれば、床に、天井に凄まじい速度で移動していく。

「接近？やれるもんならやってみな。後方？当てられるもんなら当ててみな」

「速え！木場、どうにかなんないのか！」

「流石にこの速さは厳しいかな」

苦笑いで返す木場は剣を構えることしか出来ない。その瞬間、塔城の傍にギリアムは着地。反応したが、4本の切り傷を肩に残して、リアスへと距離を詰める。

銃声が響く。眉間に弾丸が撃ち込まれても速度を緩めないリアスにギリアムを鋭い爪で切りかかる。リアスの襟首を引っ張り、入れ替わるように八幡の背中に幾つもの×印が刻まれる。

「八幡ー！」

「いてえ……」

膝をついた八幡はあちらこちらに発砲。ギリアムに当たる気配はない。

「ハハハ！トチ狂ったか！」

迫っていた木場から繰り出された刺突。剣の腹を自慢の牙で挟み込んで、噛み砕く。木場に攻撃をしようと殺意を向けると、赤黒い魔力の塊を受けずに回避。遠距離からのリアスの魔法であった。これは魔法は有効だと証明しているようなものだ。

「当たるわけねえだろ、トロクせえ！」

「そうでしょうか？」

室内の半分を埋め尽くすほどの電撃が流れ、空中を移動していたギリアムは、地面に落下。

「彼がただ乱射していただけだと本当にお思いで？」

言われたギリアムはアルジェントの治療を受けている八幡を見やる。

当てるだけが能ではない。避雷針の役割を果たす弾丸を壁や天井に打ち込んで、姫島が電撃を上手く放てば攻撃範囲が広がる。八幡は動きの速いギリアムを追い詰めていたのだ。

姫島は倒れ伏したギリアムに歩み寄る。

「あなたみたいなタイプは初めてではないの」

「クソがッ！」
「淑女に向かってそれはないんじゃないかしら。さようなら、狼男さん」

悪魔（デビル）

「昨日は凄かったね」

「は？」

「そうだぜ、比企谷！銃バンバン撃って！かつこよかったぜ！」

翌日の部室。部活メイト2人に絡まれ、昨日の話で盛り上がる。既に全員揃っている。

昨日はギリアムを倒した後、結界は消え解散となった。皆八幡の腕を目の当たりにしてそれぞれ思うことがあったようだ。

「銃の腕もそうですけど、朱乃先輩とコンビ組んでいたの本当だったんですね。阿吽の呼吸でした」

「あらあら疑っていましたが、小猫ちゃん」

「そういうわけではないんですが……」

イメージ出来ない。彼女の気持ちは他の部員も同様で、昨日の戦いを見るまで半信半疑であった。学園屈指の美女に片や友人0のボツチ。無理もなかった。

「本当に仲良かったんだな、比企谷」

「別に仲がいいわけじゃねえ。組んでた方が色々と効率が良かっただけだ。仲間意識なんてねえよ」

「……………」

姫島の表情が暗くなるのを見た兵藤は声を荒げる。

「比企谷！なんだよ、その言い方は！一緒に戦った仲なんだろう!？」

「場合によっちゃ1人で戦う。それにコンビは解散した。欠片でも仲間の認識があったら高校に入るまで会わないなんてことはないだろ」

「……………そ、それは」

「いいんです、兵藤くん。今はこうしていられますから」

姫島は首を横に振る。兵藤は納得していない様子で渋々下がる。皆、解散した理由は聞く気にはなれなかった。

気まずい空気が蔓延し出す中、部室に銀髪のメイドが入ってきた。

「グレイフィア様……………」

木場が呟き、部長のリアス・グレモリーは顔をしかめる。

八幡は彼女の顔に見覚えがあった。リアス・グレモリーの兄であるサーゼクス・ルシファアの妻にして女王。世間では“最強の女王”と謳われている。

裏手配書ではトップレベルの額とされている。昨日のリアスを狙ったギリアムも裏手配書で儲かろうとした輩だろう八幡は推測していた。

「眷属が3人増えたようですね、リアス様。初めまして、グレイフィアと申します」

「兵士の兵藤一誠に僧侶のアーシア・アルジェントよ。彼は眷属ではないの」

「眷属でもない方が何故ここに？」

「成り行きよ。それよりなにしに来たのかしら？」

彼女は気遣いなのか八幡の正体をはぐらかして、話を進める。グレイフィアも察してはいるも、重要な話があつて訪れたようだ。

「はい。フェニックス家の件で」

言いかけて彼女の背後に魔法陣が出現し、炎と共に現れる赤いスーツの金髪の男が魔法陣から出てくる。

「人間界に来るのは久しぶりだな。会いたかつたぞ、愛しのリアス」
(フェニックス家三男のライザー？……………ああ、そういうことか)

なんとなくではあるが察した八幡は窓の前まで移動する。

「婚約者!?!結婚!?!」

「政略がつくけどね。フェニックス家とグレモリー家、純血を絶やさないために親兄弟がそうしたんだ」

「部長の意志はどうなんだよ……………」

「政略結婚に意志もクソもあるか」

「ふざけんな！」

八幡の落ち着いた様子に憤慨する兵藤。いや、それも含めての話だ。

「落ち着いてイッセー。まだ確定したわけじゃない。前にも言ったけど、結婚はしない」

「いや確定だよ。君のお家事情がそうさせるかな？」

「家を潰させる気はない。婿養子だって私で決める」

「君の眷属も言っていただろう？先の戦争で純血悪魔の激滅。多くのお家も消えていく。加えて“呪いの占い師”とやらがあゝの冥界で最も広い領土を持った“ゲアプ”を断絶させた。ま、噂だがね。とにかく、悪魔全体の問題さ」

“ゲアプ”の名を知るオカルト研究部員達は目だけ八幡に送るが、噂だろ噂、と小声であしらう。真偽は定かではないし、そういう状況ではないので問い詰めるような真似はしない。

「これが最後。ライザー、あなたとは結婚しない」

「俺もフェニックス家の看板背負ってるんだ。名前を汚せないんだよ」

同時に2人の眼光が輝き、戦闘が始まるかと思いきや、制止したのはグレイフィア。

「私は我が主の命でここに居ります故、それ以上やるといふのであれば容赦しません」

両者の殺意は収まり、ライザーはお道化てみせる。

「旦那さま方もこうなることを予想されていました。よって、決裂した場合の最終手段を仰せつかっております。お嬢様がそれほどまでにご意志を貫き通したいというのであれば、ライザー様とのレーティングゲームで決着をと」

(チェスをモデルにした下僕を戦わせるっていうあれか。悪魔の駒はそのためにあるとか。あ、でも年齢的に部長は無理だろ。それに……)

呑気に脳内で単語の意味を整理する。

「俺は何度もゲームを経験してるし、勝ち星も多い。君は経験どころか資格すらないんだぜ。リアスウ、念の為確認するが、君の下僕はこの面子で全てなのか？」

「だとしたらどうなの？」

それを聞いたライザーは笑い声を上げ、指を鳴らすとライザーが現れた時同様、炎と共に顔立ちの整った美女美少女が出現。

「こちらは15名。つまり駒がフルに揃っている」

その集団を羨ましがるように喚く兵藤。

「数ばかり揃えて何になるの？量より質。こちらは7人で勝負よ」

（7人で15人に戦う気かよ、倍以上だろ。赤龍帝の力は凄いんだろ
うけど、まだ未熟。部長、姫島先輩、木場、アルジェント、兵藤、塔
城。経験不足が2人。俺も詳しいわけじゃないからなんとも言えな
いけどな。あの、ところで7人って？）

「楽しみにしてるよ、リアス」

そういつて去っていくライザー一派。

しばしの静寂。グレイフィアも簡単な事項を伝えて、扉から出て
いった。

「巻き込んだじゃってごめんなさい、八幡」

「いやほんとですね」

「……なんで俺も……？」

レーティングゲームまで10日間の猶予が与えられた。その間、某
週刊誌の三大テーマよろしく修行期間に突入。本来は無関係の立場
にある彼までも木刀を握って、木場と組んで研鑽するはめになってい
る。

「二誠くんの修行にだけ付き合ってもらえないからね。こうして、同じ
条件で戦うのは久しぶりなんだ。うちには剣を使う悪魔がないか
ら。今日はとことんやらせてもらうよ」

首を狙う突きは身体全体を回転して回避するのと同時に、回転した
勢いで木場の肩に木刀を振り下ろす。すんでのところでは躲されてし
まう。

「おっと、危なかったな」

「余裕そうな奴にいわれても」

「いやいや僕は悪魔で身体能力上がってるんだよ。君も十分すごいで
しょ。ところで、“呪いの占い師”は、今まで剣士とやりあったこと
はあるのかい？同じ剣士として知りたいなあ」

なにげない会話をしている2人は木刀での激しい攻防が増している。

「……………さあな。だが、俺の友達の友達の話なんだが」

彼に友人はいない。

「そいつは、ある悪魔の領土で派手に戦っていたんだ。ある時、悪魔の下僕が現れたんだ。そいつを殺すために。その剣士は今までであった中でも上位に食い込むほどの実力者でな。相対したそいつもやばいと思っただらしいんだが、逃げ切れる状況じゃなかった。下僕の男は身の丈を超える平べったい鋭角の大剣を背中から抜いた。なんと驚くことにそれは神器でな。人間から取ったもんだってすぐに分かった」

「それで？…続きは？」

木場はすっかり八幡の話に聞き入っている。激しい運動の中でも気にすることはない。人と接する機会がなくても語り上手なのだろうか、木場の目は輝いている。

「また今度な」

「え？」

2人の攻撃がぶつかった瞬間、離しに集中していた所為か、懐に忍び込んだ八幡を一瞬見失う。当の八幡は木刀の柄を軽く木場の腹にぶつける。次いで、足を引つ掛け転ばせた。

「ひきよ……………」

卑怯。口に出しかけたが負け犬の遠吠えだと考えたのか歯を食いしばる。ましてや、話をするように言いだしたのは他ならぬ自分。

「油断しましたね、祐斗先輩」

静観していた塔城。

「返す言葉もないな。これで1勝1敗」

「次は私です」

「休ませてくれよ。長い期間運動してないんだ。急激な運動は体に悪いって知らないの？」

「初耳です」

「嘘よくない」

小柄な体から繰り出される打撃。小柄を補うほどの素早さとキレ。

八幡も見切つて、スレスレで回避。

素手で彼女に勝てる術は八幡にはない。身体能力に差がありすぎるからだ。関節技、投げ技もある。しかし、彼女も簡単にはかからない。

「ぐほお……！」

故に腹を抑えて倒れているのも無理はない。

「神器使つてもいいんだよ。というか、使つてよ」

木場は剣を創造。

「今は使いたくないんだけどな」

八幡は「天命の札」の中でも、引いてはならないカードを脳裏に浮かべながら立ち上がる。2人は八幡の言葉に疑問を浮かべる。

(ま、引いても気をつけりゃいいか)

渋々タロットカードを袖から落とす。

「力(ストレンジス)」

「いいね。それとやりたかったんだ」

木場は笑みを浮かべ、太陽に反射する剣を握り締め、一分の間も与えない。塔城も「力(ストレンジス)」とやりたかったのか、不満げ表情を浮かべていた。

「リベンジマッチといこうか」

「力(ストレンジス)」は22枚の中で一番バランスのいいカード。

八幡の好みではない。木場と初めて会った時のカードで、木場の闘志を燃えあがらせた。

「お手柔らかに」

「遠慮しないでよ。結構、本気で行くからさ」

「正当防衛だから……」

首へ一直線に描かれる軌道。木場から視線を外さず、拳で剣の腹をぶつけ首から大きく外れた頭の上にある。

反撃を打とうと入る直前で、右手に新たな剣が握られている。揺らめく火に覆われる剣で、胸を狙う刺突。

「斬撃が無理なら、熱で対抗か。だんだん分かってきたぞ、お前の神器」

「前に説明した通りだよ。それ以上でもそれ以外でもない」

「細かく言うなら、剣の耐久力、切れ味、身体能力が上がるわけでもない。言っちゃまえば魔法を剣に通してやってるんだ」

「別に隠してるわけでもないよ。それがなんだって言うんだい？」

肘打ちと刺突がぶつかり合った衝撃が塔城のところまで、風となつて吹き荒む。剣はヒビを生やしていき、粉々になる。微かな動揺の中で反対の手で持った火の剣を薙ぐ。

「ただの剣は怖くないって話だ」

「言ってくれるね。でも、僕の剣は無量大だ。それにこれはどうかな？」

地面から伸びる無数の刃。形に統一性は見られず、舌打ちをして後ろに下がるが、既に木場が待ちかまえていた。

「カードは同じでも以前の殺気が感じられない。怖くないのはこっちの台詞だよ」

火の剣は八幡の攻撃速度と同じ速さで狙ってくる。塔城から見ても、火の剣は八幡を苦戦させているようだった。

「っと、時間切れだ」

高く跳躍し、近くの木に着地。“力（ストレンクス）”の効果が見られたのだろう。すっかりやる気を失った彼は欠伸をかいていた。

「決着はまだ着いていない。降りて続けるんだ。早く新しいカードを引くんだ」

「馬鹿言うな。一枚だけでも戦ってやったんだ。これ以上、俺の神器を見せてやる義理はねえよ」

「銃があるだろう。それでもいいから」

「お前はバトルマニアなの？持ってきてねえよ。弾勿体ないし。何時か敵になるかもしれないの忘れんなよ」

「敵、になるんですか」

台詞の一部を抜き取って返すのは、下から見上げる塔城。

「さあな。そっち次第だろ。“ゲアプ”の時みたいになったら厄介だしな」

「やっぱり“ゲアプ”を断絶させたのは君じゃないか」

「言葉の綾だ。証拠もない」

「そちらは終わりましたわね。八幡、あなたも一誠さんとアーシアちゃんと魔法の特訓をしますわよ」

やってきたのは姫島朱乃。八幡はあからさまに嫌そうな顔をする。

「いや魔法の特訓する必要ないんで。苦手なの知ってますよね?」

「諦めたらそこで試合終了と、故人はおっしやっておられました」

「どつくに試合終了してるんでいいです」

八幡と姫島はお互いに魔法と銃の扱いが上手くいかず、役割分担としていた。もし、姫島に射撃の腕があれば八幡なしでも十分戦えていた。八幡も魔法が使えれば、銃の必要性はなかった。

「部長の指示でもあるので」

「……わかりました」

木から降りて先を歩く姫島の後に続く。

「ふふふ。手取り足取り教えてあげるわ」

(帰りてえ)

切実に帰宅の二文字で脳内を埋め尽くす。

「〃魔術師(マジシャン)〃で魔法使えます。神器使えない場合は銃あるので必要性感じられないんですが」

室内で挙手して意見を述べるが、姫島は聞き流して兵藤とアルジエントに魔力の説明をする。

「さっ、早速やってみましょう。体に流れる魔力の波動を感じ取るのです」

「こ、こうか?」

兵藤は独特なポーズで力んでいるようだ。

「……………」

八幡は手の平を上にして、意識を集中させるが成果は見られない。「できませんでしたあー!」

「はッ!?!」

「あらあら。アーシアちゃんには才能があるようですね」

八幡と兵藤はアルジエントの手の上にある魔力を視認。姫島も感心している様子。その後、水の入ったペットボトルを破裂させ固め

た。

「アーシアちゃんはこれを。一誠くんと八幡は引き続き練習を」

「はい……」

八幡も才能というモノを目の当たりにシヨックを受けたのか、つい従ってしまった。1ヶ月かけても基礎が出来なかった、かつての相棒の姿に叱られた子犬を連想させ、心の中で鼻歌を歌っていた。

「ゴツは頭に浮かんだことを具現化するのが大事なんです」

(マイホーム)

気だるげにそれらしいポーズだけを取っていると、雷が飛んでくる。咄嗟に回避し、飛んできた方向を確認すれば駒王学園の体操服を着た姫島が笑顔で立っていた。

「ま・さ・か。形だけで取り繕うなんてしてませんわよね」

「ひやだなあ。そ、そんなわけないじゃですかあ……」

額の冷や汗を拭うことすら忘れ、引きつった口で笑顔を返す。声は裏返るが、今更気にはしない。

「イツセー。今日一日修行してみてどうだったかしら？」

晚ご飯時、何故か食材が偏っておりジャガイモがメインになっていた。八幡は端に座り、黙々と食べていると、リアスが口を開く。

「俺が一番弱かったです」

「それは確実ね。でも、アーシアの回復。あなたの神器だって勿論貴重な戦力よ。相手もそれを理解している。最低でも逃げるだけの力をつけてほしいの」

「了解ッス」

「はい」

それぞれが返事をした後、兵藤はアルジエントを戦いに巻き込んだことに罪悪感と責任を感じているようだ。

「八幡はあとで話があるから。その前にお風呂に入りましょうか」

「お風呂ーッ！」

発狂する盛った猿を女性陣が冗談を言い合い、塔城が終わらせた。男女分かれて、だだっ広い風呂に男3人が浸かり、兵藤は壁の奥を

見ようと必死になっている。

「そういえばさ、比企谷くん。朱乃さんとどうやって知り合ったの？」
「は？」

「二人って接点なさそうじゃないか。どうやって会ってどうやって別れたのかなって。朱乃さん、気に入ってるみたいだし」

「気に入ってる？」

「きみをね」

余程嫌なのだろう不機嫌そうな顔を木場に向ける。

「冗談だろ？」

「君が関わるようになってからイキイキしてるよ」

「気のせいだ」

「なんかあつたの？」

「イタズラ好きで傍迷惑なだけだ」

「朱乃さんそんなことするんだ」

「するんだろ、あの女は」

「君にだけでしょ。少なくとも僕はされなかった」

「面がいいからじゃねえのか」

「それほどでも」

「……………」

会話が面倒臭くなったのか、先に風呂から出て行く。

「話ってなんですか？」

風呂上がりの夜風は心地よく、別荘の屋根に紅い髪をなびかせるリアスは満月を眺めている。

「来たるレーティングゲームまで時間はない。相手はフェニックス家。勝てる見込みは少ないわ」

「でしょうね。フェニックス家は再生なつう能力持ってますし」

あつさりとは肯定。手には常温のMAXコーヒーが握られ、風呂上がりの喉を潤す。

「そう。……八幡、あなたの力が必要な」

「駒がどうのこうの言ってたじゃないですか」

「“悪魔(デビル)””。22枚の1枚にあるわよね」

一つのキーワードで全てを察した八幡。

「知ってたんですか……」

“天命の札” 最弱のカード” 悪魔(デビル)””。引いてもなんの恩も得られない、制限時間も最長で次のカードを引くまでが長い最悪のカード。まさに悪魔のようなカード。ところが、このカードには秘密が隠されており、姫島でさえも知らないが、ソーナ・シトリーとリアス・グレモリーは知っている。だからこそ、生徒会に引き入れようとしたのだ。だからこそ、カードの秘密は言わなかったのだ。

八幡にとつては不利益しかもたらさない。あくまで八幡にとつては。多くの人間はそのカードこそが最強だとも言うだろう。レーティングゲームで大きな武器になり、レーティングゲーム全体のバランスを揺るがしかねない。

【悪魔(デビル)】

お互い了承の上ならば、眷属になれる。この際、駒は必要ないものとする。

もう少し細かい制約はあるが、1人分得するわけだ。数多の敵を葬った百戦錬磨の“呪いの占い師”を。

八幡は過去一度として使用したことがない。

「ファンだから、調べたの。“呪いの占い師”に助けられたときからあの時は、ありがとう。それとギリアムの時も庇ってくれてありがとう」

「へー、知りませんでした」

白々しい。彼が素直に感謝の言葉を受け取らないのは親友から聞いていた。

「やっと言えた……」

それでも言えたことが嬉しかったのだろう。

長い年月溜め込んだ、たった一言を。

「話を戻しましょう。で、俺に使えっていうんですか？」

「じゃなきや言わないわよ」

「……代わりになにを？何も準備してないなんてことはありませんよね」

「なんでも一ついうこと聞いて上げると言ったら？」

「……」

(なんでも？え、なんでもというのはいわゆるなんでも？いやいや、冷静になれ)

色欲に溺れそうになりながらも思考を巡らせる。

「例えば、グレモリーの次期当主の椅子でも？」

「それがお望みであれば」

ぶれない瞳からは、一点の濁りはない。後のことは後で考える。そう言わんばかりに切羽詰まっているようだ。

「……………お断りします。約束を守る保証がない」

「信用されてないのね」

「する要素がないので。特訓には付き合ってもいいですが、レーティングゲームに参加するのはごめんですよ」

はつきりと自分の意志を告げられたリアスは少し考え込んで、八幡を見据える。

「ふう、わかったわ。ここからは個人的な質問になるんだけどいいかしら？」

「はあ、答えられる範囲なら」

「どうして姿を隠してるの？」

「人から受ける視線が嫌なんですよ。かといって活動しなきや金が手に入らないんで。いつの間にか“呪いの占い師”とか言われてましたけど」

どうせ後から聞かれそうな質問を先読みして、聞かれた以上のことを話す。

「お金に困ってたの？」

「じゃなきや、バイオレンスな日常に首突っ込んだりしません。親もいないし。今でこそ貯えてありますけど、昔は苦勞してたんですよ」

「朱乃と一緒に？」

「姫島先輩は関係ないでしょ」

「不躰だったわ。でも、なんで朱乃と離れたの？」

親友には聞きづらい質問を八幡に投げかける。

「すれ違い、じゃないっすかね？」

八幡は息苦しかった。胸が苦しく、気分が重い。胸の中に黒い靄がじわじわと八幡を浸食している。不安が支配していく。

過去への恐怖と悲しみ、怒り。

『じゃあな、朱乃』

思い出したいくない過去を、最近では鮮明に思い出すようになり、狂いそうな不安が彼を駆り立てる。

本来、八幡が持つべきではなかった“天命の札”がこのような現状を、戦いに身を投じた過去を作り上げた。

それでもなんとか平静を保ち、なんでもないように振る舞う。

長らく一人でいすぎた所為なのだろう。彼が求めていた何かがあるような気がしてならない。だからこそ、逃げずにここに立っているのかもしれない。それでも、その思考から目を逸らし、リアスに背を向けて別荘の中へ戻っていく。

交わるハズのない相反する何かが八幡の中で渦巻いている。

「おやすみなさい、部長」

彼の姿は、出会って日の浅いリアスから見ても、いや、彼女だからこそ分かったのかもしれない。

頼りになりそうな背中では、何故か、かすれて今にも崩れそうなほどボロボロに映っていた。

「……………え」

背中から伝わる温もり。

長らく触れていない他人の体温。

「大丈夫よ。一緒に、戦ってあげるから」

分岐点

「薄暗。電気つけません?」

真夜中の駒王学園の一室で3人の男女が椅子に座り、画面に映る悪魔達の様子を見守る。

「リアスの眷属になるものだと思っていたわ」

ソーナが笑いながら八幡を見やる。

「笑えない冗談ですね、会長」

レーティングゲームは既に始まっている。しかし、両チームとの接触は見られず、リアスのチームの数人は森に罾を仕掛けている。

「レーティングゲームつてやっぱり時間かかるんですね」

「そうね。罾を張ったりで序盤は大忙しでしょう。あなた達はどちらが勝つと?」

八幡の疑問に答えると、副会長の真羅椿姫と八幡にそれぞれの予想を問う。

「私はリアス様かと。ライザー様は油断しているようですし、リアス様の陣営には手練れに赤龍帝を扱う兵藤一誠がいますので。というよりは、気持ち的に勝つてほしいですね」

「私と大体同じね。八幡は?」

「フェニックスのライザーでしょ。経験はある、フェニックスの涙つつうアイテム、不死身が2人、数も上。絶望的じゃないですか」

「数はどうにかなるとしても。フェニックスの涙とフェニックス家の再生は鬼門よね」

リアスの勢力には現在フェニックス家の再生能力に対抗する手立ではなく、ごり押ししか術はない。

「なんにせよ、新人転生悪魔がどれだけ動けるかがキーですね。兵藤とアルジエントの使い方次第で戦局は大きく変わるでしょ」

八幡が言っている傍でライザー陣営の3人が罾が仕掛けられた森へと足を踏み入れる。体育館には一誠と小猫が4人の敵と相対して

いた。

「下っ端だけで攻めさせる。明らかに余裕ですね」

「思ったより強いんですね。フェニックスのルーク」

各々の感想を述べる椿姫と八幡。一方で一誠も1対3で攻撃を凌いでいた。ジェイソンの子孫かなと幼い双子を見て、どうでもいいことに閃く八幡。反撃を始めた誠は少女たちに攻撃とも呼べない彼女たちに触れるだけ。が、妙なポーリングを始めたと思った次の瞬間、彼女達の服が破けさる。

「つでえー！」

肌色が視界に入った刹那に彼の両目に水飛沫が飛ぶ。室内で飲み物もない。水道管トラブルでもなければありえない。椅子から落ちた八幡は目をこすり出所に文句を言う。

「急になにすんですか?」

「あら?少しは眼の汚れが落ちると思ったけど手遅れのようなだったわね。あなたのような目が腐った不審者が女の子たちが裸見られたら可愛そうだから。私なりの気遣いな」

画面の一つに映っているのは、崩壊した跡形もない体育館のレプリカ。

「眼は腐ってるんじゃないやありません、納豆同様発酵させてるんです。見る人が見れば瞳の魅力に気付くんです。まったくレーティングゲームの観戦初めてなんですからね」

(俺がみてもばれないだろ、画面越しなんだから。)

椅子に座りなおす健全な男子高校生は本音の不満をぐつと堪える。2人は屁理屈に呆れていた。

(占拠したハズの体育館を丸々破壊したのは姫島先輩か。雷の巫女の名は伊達じゃないな)

「短期戦……。当たり前ね、これで相手も本気を出してくる」

木場は幻影の森の中で美女3人を相手にしている。少し退屈になったのか、あくびを掻くと爆発音がするモニター。そこでグレイフィアから塔城小猫のリタイアの宣言がされた。

フェニックスのクイーンによる不意打ち。激昂する兵藤を抑える

リアス。そこでクイーンの前に現る味方のクイーン。

「クイーン同士の戦いでかつての相棒です。ここの勝敗は大きく戦局を左右しますが」

クイーンの立場である真羅椿姫が八幡に声をかけた。

「姫島先輩が簡単にやられると思いませんが、ライザーのクイーンが勝ちそうですね」

「最初のパートナーを信用してないんですか？」

「信じる信じないの関係じゃないんですけど。普通に考えれば、フェニックスの涙持つてそうじゃないですか」

フェニックスの涙とはフェニックス家でしか作れない秘薬。使用すれば全回復する値打ちの高い代物。強力なあまりレーティングゲームでは制限がかかってある。ライザーのチームでなければ、フェニックスの涙を持つているのは王である立場。しかし、ライザーには脅威の再生能力がある故に持つている必要性は感じられない。であれば、当然他の強い者に託される。

「おお、3人相手に余裕で終わってるな」

幻影の結界に閉じ込めた3人を木場は爽やかな笑みで兵藤の前に立つ。そこに新たなライザーの駒が出てくる。その中にフェニックス家の娘がいた。木場は敵の剣士と笑みを浮かべて激闘を繰り広げている。

「決まったな」

「どこへ行くの？」

「帰ります。この勝負グレモリーの負けですね」

「……根拠は？」

部屋から出ていこうとする男子生徒の背中を睨みつける生徒会長。声色だけで怒っていることが把握できるが、自分の言った言葉を否定をするつもりはなかった。

「兵藤と木場じゃ奮闘はしてもフェニックスの娘にはどう考えても勝てんでしょ。んで、ライザーのクイーンが勝利して戦力差が開く。負け戦は決まっていたんですよ。部長じゃ三男坊には勝てんでしょうし」

「もし……もしも、あなたがいたら勝てるの？」
「たれば。そんな話しても現実はかわんない。いつだったか言ったでしょう」

『人生にセーブポイントはない。例えばもし、ゲームのように一つだけ前のセーブデータに戻って選択肢を選び直せたとしたら、人生は変わるだろうか。答えは否である。最初から選択肢を持たない人間にとって、その仮定はまったくの無意味である』

一年以上も前に言われた迷言。場所は冥界であったが、当時の2人はそんな言葉を聞いて呆れはてた。しかし、八幡に限ったならそんな無意味な問答であるとはよくわかっていた。

「選択肢がある奴は強い奴だけです」

一時期、冥界に名を馳せた少年は弱々しく、教訓の糧となった思い出したくない過去を呼び起こした。

『なんで、なんで、なんでこんなカードなんだよ……！こいよ、頼むから……！』

『泣かないでよ、お兄ちゃん。ポイント低いぞ』

『待て！待てよ！小町には手を出すな！』

『じゃあね、かっこいいお兄ちゃん。今の小町的にポイントたかーい！』

今より幼い彼の手には“女教皇（ハイプリエンス）”。それは戦闘には向かないカード。当時、銃もなく神器を手にしたばかりの彼は必死で神器に呼び掛けていた。それでも、奇跡は起こらず、ただ目の前の惨劇を見ることしか出来なかった。次のカードを引いた頃には何もかも手遅れだった。最期の最期まで笑顔で、ポイントにうるさい妹は消え去る。

以来、冥界で生活をして、姫島朱乃としばらく行動を共にした後、“新英雄派”という小規模の組織の加入した。その後は裏切り、シトリー家で厄介になっていた。

舌を打って電気のついてない部屋で仰向けになる。制服のままですんざしい記憶に気持ち沈む。

「体調が優れないのかい？」

整頓された彼の部屋に一人の青年が立っていた。八幡はその人物を招き入れた覚えはない。真つ赤な髪を背中まで垂らし、気品を感じさせる彼はリアス・グレモリーに似た雰囲気を持っていた。それも当然で彼女の兄、サーゼクス・ルシファーであるからだ。

「初めまして、占い師くん」

「初めまして、魔王様」

本人も魔王が目の前にいることに驚いてないことに不思議がつている。

「不法侵入って熟語知らないんですか？」

「警戒しないでほしいな。君にお願いがあつて足を運んだんだ」

警戒云々ではなく倫理などの問題であろうが八幡は右手にタロットカードを持ち、いかなる時でも対応できるようにしていた。

「要件をいつてくださいよ。見知った間柄でもないんですから」

「そのつもりさ」

互いに初対面。無駄話をする気はないようでも話を進めていく。

「妹のリアスの結婚式をぶち壊してほしいんだ。わかるかい？」

口ぶりからして、八幡の予想通り敗北を決したのだろう。

「全く理解できませんね。部長と三男坊、結婚させようとしてたんじゃないですか？」

「立場的には賛成だよ。純血を受け継がせるのは立場ある者の役目だ。フェニックス家とグレモリー家の間に強固なパイプが出来るんだ、やらない手はない」

「けど、シスコンとしてはナルシストの三男坊ごときには愛しい妹は渡したくはない」

「理解が早くて助かるよ」

シスコン同士思うところがあるのだろう、八幡は彼の心中が手に取るようにわかる。葛藤と煮えたぎる怒り。立場上手を出せない。助けたくても助けられない。見えない壁に阻まれ、辿りつけないまま汚されるの眺めるだけ。許せるわけがない。

「見返りは用意する。拒否権はない。神器を発動させようとしたら腕を切り落とす」

考えさせる暇も交渉の余地も選択肢もない、強制だ。有無を言わせない威圧感。つま先から後頭部までのしかかる重圧は恐怖を植え付けるには十分。一方、八幡も百戦錬磨で焦りはするもの、雰囲気は呑まれない。が、断れば恐らく死ぬ。

「……やり方は自由でいいですか？」

「ああ。任せよう。式は3日後」

それだけ言おうと、消え去る魔王。契約を違えれば地獄の果てまで追ってくるだろう。

選択権はない。

魔王がいなくなつて数分。頭も体を冷え、納戸からボロ布のロープを引っ張り出す。しまう前には洗濯してあるからか、見た目よりは清潔。袖を通して大きいめにオーダーメイドしておいたことが功を成したのだろう、いい具合のサイズだ。フードの部分で顔も隠せる。複数のマガジンに弾丸を詰め込む。

『乗り気しねえな』

変成器越しの発言は部屋の一室に響く。

死にたくないから動いているのか、魔王の気持ちを汲み取つてか、リアスのためなのか、理由は定かではない。

確かなのは、占い師が花嫁を攫うことだけだ。

花嫁争奪戦

広い西洋風の結婚式会場。教会で行われるように十字架はない。場にいるのは人間でなく、悪魔のみが揃っていた。そこにはリアスの下僕も正装で揃っており、明るい表情の者は1人もいない。一誠はうつむき、普段からは想像出来ない浮かぬ顔をしていた。唯一、和服の朱乃は八幡と連絡が取れないことに疑問を持つも、親友の望まぬ結婚で頭が働かない。

「ご息女であるレイヴェル・フェニックスは自慢話を繰り広げている。」

規定時間が回ったのか、炎とともにライザーが登場する。

「冥界に名だたる貴族の皆さま。御参集くださり、フェニックス家を代表して御礼申し上げます。本日、皆様において願ったのはこの私、ライザー・フェニックスと名門グレモリー家次期当主リアス・グレモリーの婚約という歴史的な瞬間を共有していただきたく願ったからであります。それでは、紹介します、リアス・グレモリー！」

紅い魔法陣で現れた花嫁衣裳に身を包んだリアス。

『その結婚待った』

崩れた両開きの扉から現れたのは身の丈ほどの白銀の十字架の手にするボロ布のローブを着た少年。声は変成器が使われているようで、地声は判断つかない。しかし、リアスの下僕など一部の悪魔はその姿に驚愕していた。正体を知らない人間は困惑するばかり。眼鏡をかけた貧乳及び、和服美人という例外は口角を上げていた。

「比企むぐう……！」

一誠の口を塞ぐのは朱乃。正体を口に出そうと止めたのは朱乃なりの配慮。でなければ、正体を隠したりしないだろう。多くの視線が集まる中で、2人分のむず痒い視線に耐え花嫁と新郎へと前進していく。

「何者だ、貴様！」

『好きに捉えて構わねえ。花嫁攫いに来たただけだ』

「ほぞけー」

ライザーが手を払うと、眷属である美女美少女が一斉に飛びかかる。

『正義（ジャステイス）』

白い閃光が会場全体を照らす。次の瞬間、光は十字架に収束されていく。滑らかな表面の十字架は交差する部分を中心にまばゆい光が輝く。真つ先に突き出すライザー眷属の拳に十字架の横先端を斧のように扱えばつけ、同時に十字架の神々しい光が渦巻く。

仮面をしたルークの駒を授かる、イザベラと呼ばれる彼女に興味は引かれない。彼女続いて追撃を仕掛ける美女集団にも視線を送ることもない。

『遊んでやる義理はねえ』

解き放たれる無数の白い光線はライザーの眷属のみを狙う。主に四肢や武器に当たり、命を奪う様子は見られなかった。女王やライザーの妹以外は戦意を喪失して攻撃を受けた地点から一步も動けなっていた。女王も一足遅く魔法を発動させた瞬間、“爆弾女王”と呼ばれる彼女の眼前に光の十字架が紋章となつて浮かび上がる。

女王から放たれた爆発に呑み込まれた八幡は左手を突き出し、透き通るベールのような白い光を球体に変化させ防いでいた。

『爆竹程度じゃ話にならねえよ』

それを合図に十字架の紋章が閃光さながらの輝きを放ち、白い爆発と黒い煙に呑み込まれた女王は吹き飛ばされ、石畳の床を滑る。意識はなく、仰向けに脱力する。同時に煌めく銀の十字架はカードへと戻り、八幡の手に移る。

リアス等が敗北した相手に1分もかからずに蹴散らした。

「呪いの占い師……！」

「ゲアプを滅ぼしたと言われる!？」

「何故ここに……！」

“呪いの占い師”であることに気付いた悪魔たちからどよめきが生まれる。それらの一切を通り過ぎていき、花嫁達の前に立つ。

『どうも、呪いの占い師です』

「あなた……どうしてここに……」

『事情が事情といますか。まあ、三男坊とは結婚させないんで』

「ふざけるなよ占い師風情があ！焼き尽くしてくれろわ！」

ライザーの左腕が燃え上がり、八幡を焼き尽くそうと額に青筋を立てている。一方で八幡は動じることなく冷めた目で棒立ちしていた。

「待ちたまえ」

サーゼクスの参上によって今度は彼に視線が集中する。

「かの〃呪いの占い師〃がこうして我が妹リアスを攫う気概無下にするのめどうかな」

「付き合う義理はないかと。それに〃呪いの占い師〃はゲアプ家を失くした、立派な犯罪者。今ここで殺すべきでは？」

不満を口にするライザーは正論を述べる。

「ゲアプ家を潰した証拠がない。仮にやったとしてもゲアプ家は多くの罪を巧妙に隠していた。崩壊したことによって気付けたなら彼の功績とも呼べるのではないか」

こじつけとも言えるが屁理屈。あながち間違つてもいないので立场上押し黙る新郎。サーゼクスはライザーから大勢集まる悪魔に意見を求める。

「皆さん、気になりませんか？名門フェニックス家の三男と〃呪いの占い師〃のどちらが強いのか。見てみたくありませんか？2人の決闘を。伝説同士の戦いを！」

悪魔はざわつき始め、サーゼクスの言葉に同意を求めるような小声が聞こえ始める。ライザーは顔をしかめるが、むしろ〃呪いの占い師〃を撃退し、自分の力を証明するデモンストレーションになると踏み、笑みを見せた。自分ならば、フェニックスの能力を持つ自分ならば勝てるかと確信して。

そうなれば、決断は早い。

「面白そうですね、余興にいいでしょう」

「君ならそういつてくれると思ったよ。占い師くんもそれでいいね」
『もちろん』

八幡も負ける自信はない。勝利を確信していた。

「待つて駄目よ、取り消しなさい！こんなことで出張する必要はない！」
『今更遅いでしょ。結婚式会場に殴り込んで、ごめんなさいで済まないじゃないですか。ここで引いたら肉片になっちゃいますって』

彼の言う通り後には引けない状態。サーゼクスの画策であるの
言うまでもない。

「では、花嫁を賭けた戦いを始めてもらおう。勝者にはリアス・グレモリーを与えよう」

魔王の発言によつて会場は盛り上がり、八幡とライザーは別の場所に移される。

巨大なチェスの駒が壁際にそびえ建つ闘技場に移動した八幡は対戦相手のライザーを見据えていた。

「馬鹿な奴だ。せいぜい頑張ってくれよ。すぐに終わつてはギャラリーも拍子抜けしてしまう」

炎の翼を広げるライザー。まるで我こそフェニックスと言わんばかりに誇示している。八幡は「天命の札」から一枚抜き、黄金の冠をローブの上からかぶるシュールな恰好をしていた。ライザーは顔をしかめているが、本人は至つて真面目で、自覚もしている。

「始めたまえ」

魔王によるゴング。会場にいた全ての悪魔が注目する闘い。

不死鳥VS占い師

花嫁を巡る戦いが始まる。

『「皇帝（エンペラー）」』

「ふん、翼を出さないとところを見るとやはり人間か。ならば這いつくばつていろいろおグフツウ！」

『頭が高い』

空高く羽ばたくライザーは八幡を見下すのも束の間。地面へと引き寄せられ翼の制御が効かないのか、地面に叩き付けられうつ伏せになる。落下によるダメージは再生した。しかし、立ち上がるうにも、羽ばたこうにも石畳からは離れられない。

「重い……！重力か！」

『「名答」』

皇帝（エンペラー）は重力を司るカード。不死身のライザーには有効とはいえ、倒すことは叶わない。仕方ないので、腰から拳銃を抜き、試しにあらゆる箇所を続ける。結果、意味はなさず再生されてしまう。むしろ怒りの炎が増幅されていくだけだ。一応、皇帝でも倒せる術はあれど、殺してしまう可能性がある故、使わないで銃弾を撃ち続ける。

ダメージは与えられていないが、名門フェニックス家の一人を無力化していることで、悪魔たちから関心の声上がる。もし仮に、レーティングゲームに出ているならば、このような決闘は行われていなかったと、リアス一派は思っていた。

効力が切れると業火を放出するライザーは土で汚れ、鬼の形相で立ち上がる。業火を躲す八幡は新たなカードを引き当てた。

「調子に乗るなよ占い師い！」

『お前の敗因は傲慢なところだ。能力に過信しすぎだ』

「勝ってから言え！」

『それもそうだな。』女教皇（ハイプリエンス）『』

「くたばれえ！」

弄ぶことすらしなのか、憤怒の表情を浮かべるライザーはありつたけの炎を八幡に直撃させた。女教皇（ハイプリエンス）は戦闘向けのカードではなく、相手に対してダメージを与えることはない。

『熱いな』

「貴様……！」

炎からは無傷の八幡が立つてライザーに銃口を向けて銃撃を放つ。ライザー自身に傷は負わなくとも、自分の一撃に平然としている八幡が許せないのか、血走った眼で歯ぎしりを立てる。八幡は八幡で有効カードが来ないことに焦りが生まれてくる。過去に不死身系を倒した経験もあるが、傾向が違うためカードも違ってきってしまう。例えば、先ほどの皇帝（エンペラー）で倒そうと思えば倒せた。ところが、今回は殺しは駄目なので却下した。

“女教皇（ハイプリエンス）”。自己回復能力。フェニックス家程ではないにせよ、高い回復能力が秘められている。無論、痛覚は正常

なので炎の中から飛び出し、疾走しつつ、無意味と分かっているながらライザーも急所に銃弾を当てる。

「下らん！下らん！下らん！その程度か、“呪いの占い師”！冥界に名を轟かせるぐらいだから禁手化（バランス・ブレイク）は出来ると思っていたができないようだな」

『使うまでもないだけだ』

「減らず口は大したものだな」

『お前ほどじゃねえよ』

効力は未だ継続。まだかまだかと制限時間が切れるのを待つのみ。それまでは神器でもない銃を撃ち続けるのみ。

「貴様、なぜリアスを狙う？」

『は？』

「姿を消していた貴様がなぜを狙うのか聞いてるのだ。まさか、愛してるなどとは言わんよな」

『成り行きだ。話してやる必要はねえが』

（断れるわけねえだろ）

3日前の出来事を思い出す。

（断ったら殺されるだろ……。本当にそうか？）

『……………？』

無意識に自分に問いかけていた。まるでもう一人の人格がいるかのような感覚に陥る。

（いやいや何考えちゃってんの俺は？それ以外になんかあるの？）

目の前のことに集中しなければならぬのに途切れてしまう。効力が切れるにはまだまだまだ時間を要する。“天命の札”の短所がモロに出てる瞬間とそれを補うだけの戦闘力があることの証明でもある。

「どうした動きが鈍くなったなあ」

不敵な笑みで炎を広げるが、直撃することない。ライザーの言葉は耳に届かず、別のことに意識がいつていた。記憶の糸を辿る八幡。

アーシア救出・強化合宿・フェニックス戦。記憶は八幡の意思に反して蘇っていく。

（今は関係ないだろ）

何故、フェニックス戦を最後まで見届けなかったのか。あの時、少年は笑顔ながらも真剣に強くなることに取り組んでいたオカルト研究部の面々を浮かべていた。見届けたくなかったのだ、敗北するあの瞬間を。彼がここにいるのは選択肢がなかったからではない、望んで選択肢を失くしたからだ。

(なんでこんもんが思い浮かぶんだよ……!?)

苛立ちが募っていき、ライザーの動きから意識が外れる。

「くたばれえー!」

業火の球体は足を止めた八幡にぶつかり、小規模の爆発が彼の姿を隠す。ローブの一部は焼き尽くされ、変成器も破損。ライザーが放った瞬間、“女教皇(ハイプリエンス)”の効力が途切れた。

「ふははははは! 占い師如きが名門フェニックスの前では恐るるに足らんわ!」

高笑いを上げるライザー。鑑賞するほとんどの悪魔は決着がついたと確信する。ところが、勝利を確信したばかりのライザーは異変を感じ取った。暗く冷たい深海に引き摺りこまれたような感覚に一瞬意識が遠のく。原因を探れば火柱が立ち上る方向から禍々しい殺意が飛ばされている。

直撃したのを視認した張本人に信じられないような感情が生まれる。

底知れない恐怖だ。

「死に損ないが……!」

振り絞った低い声からは恐れを感じ取れる。

「運命の輪(ホイール・オブ・フォーチュン)”が来なきやバかったな」

そう言いながら炎の中から出てきたのは、つい先ほどライザーの下僕を蹴散らした白銀の十字架を担ぐ八幡。神々しく神秘的な純白の光が球体となって、八幡を囲む。それにより、燃え盛る炎から身を守る。彼の正体が映し出されながらも、集中力を取り戻した彼は気にする素振りは見せていない。

「それが貴様の正体か。なんとも気味の悪い瞳をしている」

「ぐちやぐちやうるさい奴だな。先に言っておくが……………」

光を渦巻かせる十字架をライザーに向け、宣言する。

「お前を倒すのはこの一枚で最後だ」

「なんだと…………？」

顔をしかめるライザーに気にかけることなく、口を動かす。

「これから先、お前は俺に指一本触れることすら叶わない。意外なほどあっさりとお前は負け、部長は俺が貰う。そうなりたくなきゃ、この勝負お前の勝ちだと言って清々しく投了しろ。そうすりゃ汚名は多少抑えられる」

「口は達者だな」

「占い師の忠告は聞くもんだろ」

瞬間、激怒するライザーは全身に炎を纏い驚異の速度で八幡に突撃する。彼自身、その攻撃には自信を持っていたし、“呪いの占い師”が防げることも避けれるとも思っていたはいなかった。事実、火炎に包まれ高速で迫る業火の塊を防げる者はそう多くはないだろう。だからこそ、既に張つてあつた白い光の壁に難なく防がれることに目を見開くほかなかったのだ。

「所詮は小火だろ」

“正義（ジャスティス）”は22枚の中で最も対悪魔に特化したカード。聖なる光を自在に操り、防御にも攻撃にも扱える汎用性の高いカード。

これはライザーに限らず、どの悪魔に有効なカードの1枚。駄目押しするなら、“天命の札”の炎を宿す“太陽（サン）”の方が脅威的。左手の人差し指に光を収束させていき、再生能力を持つライザーの右肩を光速で貫く。

彼の動体視力では追いつけない一撃を受け、肩に風穴が空いたことを自覚するのは数瞬を要した。

「ぐうおおおおー！」

再生能力を持つ男の傷は塞がることなく、血があふれ出す。激痛のあまり転げまわるライザーに気品の欠片は失っていた。哀れに思いながら、十字架を振り上げ腹に打ち込む。幾度となく、無表情で十字

架を叩き付ける。呼吸ができないのか、声を発さない。顔も腫れ上がり土も付着し、一目では彼がライザーと判別つかない。

「悪魔はこういうの苦手なんだよな。特にお前みたいな能力を過信した馬鹿はな。言っただろ？」

序盤に言われたことを思い出し、自身の過信を認めざるを得なくなった。

「終わりだな」

十字架の光を一層輝かせた八幡を見て、ライザーはさすがのように手の平を突き出す。

「待て！貴様の力は十分わかった！どうだ、金ならやる。なんならこのライザー・フェニックスの右腕にしてもいい！72柱の一つのな！」

「権力自慢か、哀れな奴だ」

「このままでは冥界から指名手配されるのだぞ!?今なら間に合うぞ貴様！」

「この勝負は正式な決闘だ。罪は犯していない」

「貴様はわかっていない！この結婚は冥界において重要な婚礼だ！純血を守る、悪魔の未来に繋がるんだ！」

これ以上の問答は時間の無駄だと判断したのか、無様に腰を抜かして後退る早口で喋る男を無視して十字架を掲げる。聖なる光は徐々に輝きを増していく。目を開くことすら、困難になっていく強烈な光にライザーは本能的に恐怖を感じる。

「ジャステイス・オブ……………」

「ひい、やめろおおおおおおお！」

「メイデン」

銀の十字架からは純白の棘が無数に貫く。ライザーの真下にある石畳を。それでもライザーの戦意を喪失させるには十分なものであった。息を荒げ、目の焦点が合っていない。

「当てねえよ。死なれたら本当に指名手配されかねないからな」

占い師と不死鳥の勝敗は決した。それは誰が見ても、言い訳のしようもなかった、

勝負は終わっても使用時間が残っている、十字架は消えない。足元は音を立てて崩れ去る。下には豪邸と庭が広がる、幸い、カードが良かったのか聖なる光を応用すれば着地に問題はない。

(雑過ぎない?)

瞬時に光を展開。オーロラのような布が足裏に敷かれ、衝撃を吸収して地面に着地。ライザーの方は妹が連れ出していた。そこには八幡を呼び出した張本人が立っていた。

「中々じゃあないか」

「随分上から目線ですね」

「本気だしてなかったからね」

「禁手化のこと言ってるなら誤解がありますよ。フェニックスには“正義（ジャステイス）”。他には“月（ムーン）”と“審判（ジャッジメント）”くらいしか倒せなかったんですよ」

「それは興味深い。是非、聞きたいな」

「手の内晒すわけじゃないでしょ」

「それもそうだね。なんにせよ、これでご破談になったわけだ、感謝するよ。これで君とのお喋りも終わりだ」

ようやく複数の気配が近づいているのに気づいた八幡はリアスを戦闘にオカルト研究部の面子が近づいているのが見えた。

「八幡！」

移動してきたまま抱き付いてきた割には衝撃は強くなく、肌色のクッションが彼の顔に襲い掛かる。戦闘中でも動揺しなかった彼が慌てふてめいている。

「あああのぶひよう!?!」

「ありがとう」

しかし、震える声が彼の頭を冷やした。

「あなたには大事な場面で何度も助けられた……、命も、未来も」

双眸から涙が零れている、

「……………俺が動くのは自分の為です。助けられたっていうなら勘違いです」

「あなたが何と言おうと、あなたがいなければ私はこの世にいない。

望まぬ結婚をしていた。幸せになれないって確信してる」
「……………」

リアスを押しつけ大股で一步離れる。

「本当によかったんですか。三男坊はボンボンですし」

「今更なにを……………」

呆れる木場はやれやれと首を振る。

「やってから後悔するタイプなんだよ」

文句あるかと、堂々と言い放つ八幡。

会場に残った悪魔たちは今の戦いで婚約など頭から抜けている。主に“呪いの占い師”で大盛り上がりであった。その中には記者やフリーライターまで居合わせていた。

一夜の激闘は冥界全体に広まる。

「呪いの占い師花嫁強奪……………」

冥界で発行されている新聞の一面には素顔を晒す八幡が映っていた。昨晩のことが細やかに記事され、放課後の部室で震える手で新聞をテーブルに置く。記事にされるまでではない。これまでで何度も経験があるからだ。問題は写真の部分である。

素顔。今まで隠し続けていた顔が綺麗な画質で冥界中に広がっている。

「あらあら、綺麗に映っていますわね。でも、目はどうにもなりませんのね」

「余計なお世話なんすけど」

もう一部買っているのか、他の面々も冥界の新聞に集まっている。

「凄いことになってるね」

「……………人ごとかよ」

「十字架が懐かしいです」

「比企谷って無茶苦茶つええんだな」

「当然ですわ」

「なんで朱乃先輩が偉そうなんですか？」

木場、アーシア、一誠、朱乃、小猫と各々会話を繰り広げる。

「八幡、今日の夜空いてるわよね」

「いえ、今日はちよつと用があるんで忙しいですね」

「そう、空いてるのね。丁度よかった」

「いや、今忙しいって言いましたよね？」

八幡の言葉を無視して鼻歌を奏でるリアス。反対に思案顔の朱乃。
その晩、比企谷家で一人の少女が住まうことになった。

聖剣

美人局。つつもたせ、と読む。容姿が優れた女が純粹な男心を弄び、金を貪るある種の詐欺。八幡の父はそれを経験し、息子に教え込んでいた。八幡も金銭的なトラブルにはならなかったが、幾度もピュアな心に傷を負い、女は信用してはならないと思うようになる。決して優しくされても勘違いしないようにと心がけ、ラノベのようなハーレムが降りかかってもチームワーク抜群の美人局と真つ先に疑うだろう。

「なにが起こった？」

目覚まし時計がなる前に息苦しさを覚え、寝ぼけた頭で体を起こすとリアス・グレモリーが寝ていた。何故か、裸で。頭が真つ白になり目の前の事実だけに意識がいき、顔が熱くなるのを感じると、速やかに音を立てずに部屋を出て、一言呟いたのだ。

「おはよう、八幡」

姫島朱乃は八幡のYシャツを無断で借り、にこやかに挨拶を送る。バストを強調し、下にはなにも履いてないように見えるが、八幡にとってはどうでもいい。美人局代表と冗談半分で認識している彼女を見て瞬時に顔の熱が冷めていく。どころか血の気が引いていた。

山ほどの質問をかつての相棒にぶつける直前で、無駄な質問を省くために、昨日の出来事を振り返る。

両親が揃っている時間にインターフォンが鳴る。母に出るようになんと言われ渋々玄関を開くと笑顔のオカルト研究部部长がこんばんはと挨拶する。他の人間であれば、喜ばしい瞬間なのかもしれない。が、八幡は全身に冷や汗を流し、どうすべきかと頭を回転させた。嫌な予感しかせず、両親にも知られたくはない。帰らせようにも言葉には気をつけなくてはならない。そんな思考も虚しく、父親が居間からやってきてしまい、リアスを視界に入れてしまった。

そこからの流れは早かった。リアスは家に上げられ、両親は彼女に興味津々で質問攻めをしていた。生まれはどこだなの、彼女かだの。あらかじめ想定していたのか、スラスラと答えていく。八割九割が嘘

だったので、女はいかに嘘が上手いかを認識した。本当のことをいったのは、所属の部活に八幡の彼女どないことという無難なモノ。あとは日本人ではないことくらい。

八幡はなるようにしかならないと諦め半分で頬杖をついていた。この家では八幡に発言はあまりない。

質問の嵐が過ぎ去ると、待っていたかのように口を開くリアス。悪寒が背筋を撫で、彼女を注視する。

「実は下宿先にいられなくなってしまい、泊まる宛もなく後輩の八幡くんに来てしまいました」

うちじやなくてもいいだろ、と多くの観点からの思いを心中でぶつけまくる。

「……………はっ？」

数秒して、リアスがなにを言ったのか理解し、更なる疑問が生まれる。

両親の記憶には悪魔や八幡の神器などといった次元を超えた話はない。それは八幡の神器によって記憶が書き換えられたからだ。身内故に辻褄を合わせるのに苦労はしたが、出来てしまえば近所の根回しはさほど苦労はしなかった。

それだけにリアスの行動は八幡にとって不利益しか及ばさない。苦労して戻った場所に厄介ごとを持ち出されたら洒落にならない。下手なことを言わず、両親に愛想良く、演技がかかった涙を見せ、口を動かすリアスを見つめ頭を回転させる。そもそも、彼女のそばに事情を理解している朱乃がいる。知らないとは思えないし、こんな回りくどい真似はしないだろう。

少なくとも八幡が神器を両親に隠しているというのは把握しているようで、話を聞き流していた八幡は両親が快諾したことに驚きを隠せないでいた。そういえばとパンパンの封筒を母に渡していたのを見た気がする。父親は父親で美人局であれば美人局で息子のいい経験になると途中で教育熱心にぼやく。

いきなり泊まることになったリアスは八幡のベットに座っている。

「どういふことですか？」

椅子に座り、寝間着に着替えているリアスに問いかけている。

「誘惑？」

美人が可愛らしく小首をかしげる姿は一般の男子が見れば、勘違いするなりするであろう。百戦錬磨のボッチは頬こそ染め目線を逸らせど、勘違いはしない、幼き頃より騙され、朱乃にからかわれ続けた心を打ち砕くには足りない。

「そ、そういうのいいんで」

「はあ、信用ないわね。半分本気なんだけど」

「残り半分は悪戯ですか？」

「違うわよ。あなたを守るためよ」呪いの占い師「さん」

「ベビーシッターを頼んだ覚えはありませんよ」

フェニックスの勝負により冥界中に知れ渡り、注目が集まってしまった“呪いの占い師”。それは“呪いの占い師”に恨みを抱く悪魔にも顔が知れ渡ってしまったのだ。よって護衛か監視をつけなくてはならない。

そこまでは覚えているし、1人でベットに潜ったことも覚えていいる。ところが、リアスをベットに入れた記憶も、朱乃を上げた覚えもない。

「帰ってください」

「あいさつが先ではなくて？」

「家にした覚えがないもんでね」

「お義父様がいられてくれたの。お二人ともお仕事に行っていないわよ」

記憶はなくとも彼女を家にいたいとも思わない。過去、家にいたことがり、昨夜のように母からの質問を受けた朱乃は誤解を招くような回答をして散々な目にあっている。誤解は解けたものの、以来あまり両親に会わせたくはないのだった。

土曜日の朝、着替えた朱乃は朝食の準備をして3人分の焼き魚や味噌汁をテーブルに並べていた。私服に着替えたリアスも朝食のテーブルに座り、いただきますをして朝ご飯を食べる。この時点で専業主夫としての仕事が奪われていることに気付いた彼はやられたと

思い、朱乃を睨むが彼女はなにがなんだかわからない。

会話は特に交わされなく、余計な発言で朱乃にからかわれるのは面倒だと判断し、朝のことは言及することはない。

「八幡、今日暇よね」

「ええ、特に予定はありませんわ」

「ちよつと姫島先輩？俺に聞かれたんですよ？」

「今日は一誠の家に行くわ。食べ終わったら準備して」

「兵藤の家？」

「作戦会議よ」

「で、こつちが小学生のときのイツセーなのよー」

「あらあら、全裸で海に」

「ちよつと朱乃さん！って、母さんも見せんなよー」

兵頭の部屋で会議なんてものは行われない。ただ部員が集い、一誠のアルバム鑑賞になっていた。場所はこの人数では流石に狭いが、気にする者はいない。八幡も八幡で交友関係のなさから、そわそわして悪い気はしないでいた。もっとも会話はしないで、アルバムを適当にとつて視線を落としているが。

写真を見る限りでは今も昔もさほど変化は見られない。結局のところ人間は変わらない。悪魔にはなっても中身は大して変わらないし、周りの評価や環境が変わっただけで自分が変わった気になる人間は多々いるだろう。留学して日本に戻ってくるなり、「日本は遅れんてんなあ」という大学生がいい例だ。はたしてそれで活躍できた人間はどの程度の割合なのだろう、統計を取ってもらいたいものだ、と心の中で長くぼやく。

「これは聖剣だよ」

兵頭と木場がじゃれ合っているとと思ったら、トーンの低い声に八幡は反応する。

聖剣といっても一言で言ってしまうえば多くの種類が存在する。過去「呪いの占い師」として強敵とも呼べる聖剣使いを打倒し、聖剣そ

のものを消滅させた。同時に聖剣の恐ろしさを直に味わっていた。その経験から学んだことは聖剣には関わらないといういかにも彼らしい消極的な判断であった。

聖剣と聞いた彼はこれでもかと顔を引きつらせ、聞かなかったことにした。

球技大会と云えば、やる気のない生徒にとって卓球はNO.1の人氣を誇ると言っても過言ではない。駒王学園ではクラス対抗だけにとどまらず、部活対抗までやるから八幡にとってはたまったものではない。クラスでは野球、部活ではドッチボール。やる気は毛頭ないが、リアスの異様なやる気からして手を抜ければ目をつけかねられない。それとは対象的に木場は心ここにあらずといった様子で上の空。「気になりますか？」

「部長がイラついてるんでとぼっちりがこなきやいいなぐらいには」

木場を見ている八幡に歩みよるのは朱乃。

八幡の言う通り木場にリアスは苛立ちを募らせている。

「聖剣計画、ゴッ存じ？」

問いかけには首を振るだけ。

「簡単に言えば聖剣エクスカリバーを扱える人間を育てる計画なんです。多くの子供たちが選出され、彼もその内の一人。ですが、結局彼を含め適応者は現れずじまい。結果、彼だけが生き残ってしまう事態になったのです」

「……………」

非常に大雑把な説明でも八幡は理解した。彼自身も似た境遇をしているからだ。彼の“天命の札”も本来の所有者は妹の比企谷小町なのだから。木場の境遇には驚きはしなくとも、親近感は少なからずは湧き上がる。だからどうこう、するわけでもない。

「復讐か……………」

「ええ。リアスも気づいているでしょう」

「厄介なことにならないかいいですけどね」

次の日、現役信徒2人が部室のソファーに座っていた。八幡は心の

中でため息を吐きっぱなしで、若干の鬱になっていた。隣にいる木場は殺気立ち、それを隠す気もない。

「先日、カトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテストタント側、正教会側に保管、管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われました」
紫藤イリナは言った。

最強とも謳われた伝説の聖剣だったが、大昔の戦争で折れてしまい、その破片を教会が回収し、錬金術を用いて7本の聖剣に分けて作り直された。当然ながら一本一本の力は本来の聖剣エクスカリバーには及ばないが、芯となっている破片さえ無事なら剣自体は破壊されても再生できるため、見方によればオリジナルよりも使い勝手はいいだろう。

リアスの説明を受けた兵藤。そこに気遣いなのかゼノヴィアは布に巻かれていたエクスカリバーを晒す。

破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）。続いて紫藤イリナも紐に変えていた擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）を刀に変化させた。

「その犯人もわかって、回収に来たのね。それとも私達悪魔が疑われているのかしら？」

「犯人は神の子（グリゴリ）を見張る者だよ。私達の注文は回収するまでの間、戦いに手を出さないで欲しい」

墮天使の組織。そこに奪われたとなれば戦力が減っただけにとどまらず、敵対する組織の戦力が増してしまった。八幡はその部分是他人事だが、部長のリアスは頭に血を上らせる。

「……どういう意味かしら？」

「上は悪魔と墮天使どもと同様に信用していない。聖剣を神側から取り払うことができれば、悪魔も、万々歳だろう？ 墮天使どもと同様に利益がある。それゆえ、手を組んでもおかしくない。だから、先に牽制球を放つ。墮天使コカビエルと手を組めば、我々はあなたたちを完全に消滅させる。たとえば、そちらが魔王の妹でもだよ。と、私たちの上司より」

「悪魔と墮天使が組んでるならもつと上手くことをなしてるだろ。少

なくともここに来たなんてばれないようにする」

リアスがキレると察した八幡は彼女等の会話に口を挟む。3人はしばらくの沈黙。

「いちおう、この町にコカビエルがエクスカリバーを3本持って潜んでいることをそちらに伝えておかなければ、何か起こったときに、私や教会本部が様々なものに恨まれる。まあ、協力は仰がない。そちらも神側と一時的にでも手を組んだら、三すくみの様子に影響を与えるだろう。特に魔王の妹がいるなら尚更」

嫌な空気が流れる中、去ろうとした直前でアシアを見て、魔女と呼んだ。そこでエクスカリバーに手をかけたゼノヴィアはアシアを見据える。室内にいる全員に緊張が走る。

「なんの真似だ？」

「こつちの台詞だろが」

ただの拳銃をゼノヴィアに向ける八幡。

「裏切り者とはいえ元信者。我らの神ならば救いの手を差し伸ばしてください。ささるはず」

「TPO教わらなかったの？時、場所、場合。全部駄目じゃねえか。お前らのお粗末な教育なんて知ったことじゃねえけどな。あーいや悪かったな。聖剣も聖女も守れない組織に無理言っちゃまって」

「なんだと……」

この時点で2人の矛先はアシアから八幡へと完全に移っていた。

「違うのか？信仰とは名ばかりに縋っているだけの連中だろ」

「面白い。私たちの力を見せてやろう」

「八幡！ダメよ！」

「ちようどいい。僕も相手になろう」

「誰だ、きみは？」

青筋を立てるゼノヴィアの問いかけに木場は不敵に鼻で笑う。

「君たちの先輩さ。失敗作だけどね」

太陽の古代生物

「今すぐ神に祈れば一瞬で断罪してやる」

大剣を背負う少女は剣士と占い師の2人に挑発する。

「無宗教なもんで。内輪揉めとかやだしな」

「悪魔は神に祈らない」

場所を移した面々は各々の武器を手に空気が張り詰める。悪魔対天使の非公式の勝負。周辺には赤い結界が張られ一般人にバレる心配はないようだ。当の八幡はまさか挑発一つで戦闘になるとは夢にも思わなく、後悔の念が押し寄せる。RPGでいうイベント、逃げる選択肢は通用しない。

わざわざ神器を見せることもないと判断し“天命の札”は使用せず、イリナに銃口を向け何時でも撃てるよう引き金に指をかける。脳内では相手の神器の情報を参考にし、お互い怪我をしないように事なきをえようと算段を整えている。自分に対しての被害を最小限に抑えたいがための策。ここで勝ってしまえば余計に目をつけられてしまう。

「銃だなんて……、そんな鉄の塊で聖剣と戦おうだなんて。ああ！そんな悪魔達に魅入られたイツセーくんがかわいそう！出来れば今すぐにも私の手で罪を裁いてあげたい！でも、安心してこの悪魔の前にあなたからよイツセーくん！」

「……イリナ、悪魔とはいえ殺しは駄目だからな」

豹変する友人の様子に表情を引きつらせながら大剣を構える少女は忠告を送る。

悪魔の陣営も木場を除いて、一誠に知り合いかと視線を送る。当の本人は首を横に振る。

「いやいや俺知りませんよ!? ってうをあー！」

八幡との戦いを差し置いて、方向転換し刀の形状をしたエクスカリバーを一誠に向けた。

「な、俺!? 比企谷じゃないのかよー！」

右腕に真紅の籠手を展開させ、その場から背を見せずにイリナから

距離を取る。戦うはずだった八幡は運がいいと思い、銃をホルダーにしまう。

「……イツセー先輩助けないんですか？」

「因縁があるみたいだし邪魔しちゃ悪いだろ」

小猫の問いかけに他人事のように返す。一誠の方は興味がないのか、木場の方の見物を決め込む。

「氷と炎の魔剣か。汎用性のある神器はいいよな」

八幡は個の戦闘力において重要視するのは汎用性の高さだ。自身の神器のコンプレックスから来るものなのだろう。多彩さだけではない、冥界にも八幡は群を抜いている。しかし、ランダムなデメリツトが多様な戦闘技術を阻害する。

「でも、裕斗先輩心配です」

「そうね、今の裕斗は冷静じゃない」

一撃で木場の魔剣を粉碎した聖剣。更に地面に接触した瞬間、小型のクレーターが土煙を上げて完成した。木場はその光景に苦虫を噛み潰したような顔をする。

八幡と手合わせした軽やかさが見られない。普段の彼なら受けず、躲すか受け流すかしてカウンターを繰り出していただろう。

「アホか」

木場は己の持ち味も忘れたのか身の丈を超える魔剣を生成。禍々しく、魔剣と呼ぶに相応しいが、木場の剣術と速さを活かした戦闘には向いていない。案の定、聖剣と魔剣のぶつかり合いは魔剣の敗北に終わった。本来の実力であれば、地に伏しているのは木場ではなく、破壊の聖剣を持つ彼女だっただろう。しかし、冷静さを失ったが故の結末。言い訳の余地はない。

紫藤イリナを相手取っていた一誠もいつの間にかやられていた。

それから教会の使命を果たそうとする2人は去っていき、憎しみを抱えた騎士も主の元から去っていった。

「あー。で？俺を呼び出した理由は？」

「……………」

休日の昼間に男女4人が駅前が集まっていた。3人はオカルト研究部。気だるげに声を出す。一誠にご執心で付き添っているアールとたまたま会った小猫は神妙な顔つきをしている。一誠に興味深そうにしている。呼び出された生徒会の匙は一誠の言葉を待つ。

「聖剣エクスカリバーの破壊許可を紫藤イリナとゼノヴィアからもらう」

主の知らぬところでオカルト研究部と生徒会の下僕達が仲間の為に動き出そうする。

そして、太陽が沈んだ代わりに満月が照らす駒王町の一角で2人の男が対峙していた。1人は駒王学園の制服を身にまとい、前方の5対の黒い翼を広げた墮天使を前に脂汗をかく。周囲に結界が張られ逃げ場はない。本来監視の立場にいる悪魔は仕事上の関係で今はいない。

「自己紹介をしておこうか、“呪いの占い師”。墮天使のコカビエルだ。お前と1対1の決闘を申し込む」

「墮天使のトップがこんなところまで来て用事がそれだけなわけありませんよね」

ニヒルに笑いホルダーの銃を抜き、コカビエルに向ける。何故、墮天使の幹部がここにいか理解するのに時間はかからなかった。

「聖剣の事件はあんたが絡んでるな」

点と点が線になる。具体的な理由までは分からないが、現在抱えている聖剣問題この場所でコカビエルがいるというのは偶然にしては出来過ぎている。

「ご名答。もう直明かすつもりだったから隠すつもりもない。遅いか早いかだけだ。俺は退屈なんだよ！あの血を血であらう動乱の世を取り戻す！何十、何百万の生命体が起こす戦争の再開を望んでいるんだよ、この俺は！だからその前祝いとしてお前に遊んでもらうことにしたんだよ、占い師い！」

「戦争……、駒王学園が狙いか」

「ああ、そうだとも、本当は聖剣使いを利用するつもりだったんだがな」

「……………はあ」

あわよくば土下座に靴舐めの合わせ技で見逃してもらおう計画でいた。元々聖剣などと関わる気0。特に墮天使の幹部に指名されるのは厄介極まりない。だが、結界を張られ逃げ場はない。なくともコカビエル地の果てまで追いかけてそうな勢いでいた。

絶体絶命、

「墮天使に碌なのいないな」

ではない。

空中でシャツフルされていく、タロットカード。コカビエルは狂気の笑みを浮かべ、両手に光の剣を精製する。真つ向からの腕試しに胸を躍らせる。

ただし、コカビエルは一つミスを犯している。

「お前の実力を見せろ」

彼の实力を見誤ったことだ。八幡は己の实力を見誤る愚行をせず、冷静に分析できる。更に言えば、損得勘定で動く彼が動くには今の状況は不幸中の幸いと言えよう。面倒なことを後回しにしないで、今実行する。周りに誰もいないのは、自分の力を可能な限り見せたくない八幡にとって都合が良かった。

「太陽（サン）」

最大火力のカードを引き当て、左手のカードは炎に変化しつつ渦巻きながらバスケットボールほどのまばゆい炎の球体を作り出す。カード名通り、太陽さながらの赤と橙色の黄色の三色の輝きをしていた。周囲は昼間のように照らされていた。光に比例して八幡の影になる部分は酷く暗い影が生えている。

コカビエルくらいの距離をおいても火傷しそうな熱気が空気から伝わってくる。

「フハハハハハハハハハハ！」

自分を見つめるとす黒い双眸に歓喜の声を上げるコカビエル。まさに命の危機に晒されているのが直感で把握できた。退屈な悠久を

過ぎて、持て余した戦闘欲を満たしてくれる相手が現れた。あの戦争を生きた墮天使の幹部が弱いわけがない。

左腕を真上に向け、増大していく光の槍を八幡に向ける。受ければ一溜りもないだろう墮天使幹部が誇る一撃。

「サン・オブ・トリケラ」

己で磨いた技術で太陽から9 mほどの同色の太古の生物が呼び出される。

3本の角が特徴的で四足歩行が重たい体を支える。頭から首の上にかけてフリルがついた恐竜の中でポピュラーな

トリケラトプス。一説ではその巨体故に突進力はないと言われているが、太陽で生み出されたトリケラトプスは異なる。

巨体に見合わぬその一直線に突き進む動きはまるで新幹線を連想させる。コカビエルにとっても凄まじいものでも、避けきれない速度ではない。しかし、何かに飲まれたのか飛ぶ寸前でコカビエルは光の槍を放った。その一撃は相当な威力を誇る者で多くの悪魔、天使を葬り去ってきたコカビエル自慢の攻撃。

しかし、光の槍はトリケラトプスに触れた瞬間、音を立てることなく蒸発。

今も尚、左手に太陽を浮かせている八幡。

コカビエルは何が起きたのか一瞬間の中が真っ白になった。

「太陽（サン）」は“天命の札”の中で1・2を争う高威力のカードだ。俺自身あんまり好きじゃないんだが……」

言葉を紡ぐ。太陽から鳥の形状をした15 cmの小型プテラノドンが軌道を描き、コカビエルを標的に定める。1発だけで終わることはなく、20発30発と続々と発射されていく。通過した後は熱線が残る。曲線を描いたり旋回したり無駄な動きはあるが、八幡にはコントローलは不可能。まるで“天命の札”の気まぐれさが表れているようだ。それでも標的を逃すことなく、むしろその読めない動きこそがコカビエルを翻弄する。

「……皮肉なこと最初に使いこなせたんだ」

俺に日は似合わないと言っていた時期があったことも思い出すの

でこのカードを死にたくなる思いに駆られるのだ。

「クソがああああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ!!!」

最初の笑みから一変。怒りが溢れだす。せめてもの抵抗なのか周囲に结界を張るも、1秒にも満たない時間で作れるものなど知れている。一発の爆撃で粉碎される光の结界。

むき出しの肉体は炎のプテラノドンに囲まれていた。

「サン・オブ・プテラ」

初撃は背中到的中。小型とは思えない爆炎が黒い翼の羽を散らす。墜落の危機を感じ取ったのか上空に上がろうとした時、腹部への爆撃。黒い煙の中からコカビエルが上に投げ出され、視界には炎の滅亡が広がっていた。残りのプテラノドンは間伐を空けず、全弾命中する。爆発の嵐がコカビエルの姿を隠す。

爆炎に包まれた地上に投げ出された時には全身に大やけどを負っていた。かろうじて息はあり、意識もある。

「戦争とかやつてもいいが、俺を巻き込むなよ。弱火にしといてやったから」

火加減をしていたかのような口ぶりはコカビエルの耳にはつきりと届いていた。周囲を覆っていた结界が硝子のように割れていくと同時に、コカビエルの横たわる地面に光る魔法陣が展開され、光に包まれたコカビエル。仰向けで八幡を憎々し気に睨みつける。極悪人もびつくりの威圧的な殺気。無表情で受け流すような八幡だが、内心肝を冷やす思いだ。

「次だ！次こそ殺してやる！四肢は八つ裂きにして豚の餌だ！胴体は馬に引き摺り回してズタボロにしてやる！」

最後にそう言い残して魔法陣ごと消え去るコカビエル。

「……………必要以上に脅すなよ。夜も眠れないだろ」

圧倒的勝者はその場で腰を抜かす。

神器舞踏

「エクスカリバーの破壊を？そんなことして大丈夫なんですか？」

コカビエルとの戦闘から数日後、夜中の公園に呼び出された八幡はちやうど寝ようと思っていたところで呼び出され、憂鬱気味だ。噴水の前で涙を流しながら尻を抑えている匙と一誠を見て何事かと思つたが、2名の頭目と要件を聞かされて納得がいった。

「大丈夫じゃないに決まつてるでしょ。最悪戦争よ戦争、あなた分かつてるの？」

「俺に言わないでくださいよ……」

ソーナの指先が八幡の鼻をつつく。怒っていますと八幡に詰め寄る。たじたじの八幡。

「大体ね、同じ部の人間に誘われなくて生徒会が誘われるってどういう状況なの？どれだけ交友関係狭いの。どうせ、オカルト研究部でも自分からしゃつべたりしないでしょ。どれだけ悲しい運命を背負ってるの」

「な、なんで知ってますか……？覗いてんですか、支取先輩……」

「あなたの習性くらい把握してるわ」

「俺は動物かなにかなんですかね」

「とにもかくにもあなたも同罪よ。お尻出さない、1000回よ。あと八幡の敬語が慣れないの、追加500」

「いやいやおかしいでしょ。色々」と

2人のやり取りをみて、クスクスと笑うソーナの女王。反対に嫉妬の念を送る兵士。匙は厳しいソーナを幾度となく見てきた。説教もされてきた。ただ、理不尽かつ毒を吐いてる姿は初めての光景であった。同時に楽しそうなソーナを見ることも匙の中では過去に例がない。ソーナ自身笑うことが少ない。笑みを見せても社交的なものだろう。

なんともいえぬ距離感が2人の間にあった。八幡も心なしか態度が砕けていた。

「まあまあソーナ様。彼がハブられるのは今に始まったことではない

でしょう」

「フオローになつてません。言っておきますが俺は率先して一人で行くんです。」

間に入る朱乃。ソーナの怒りを静めると同時に八幡にダメージを与え、胸を張って言い返す。八幡にとつても戦力的な意味でもソーナと朱乃はある部分においては特別な存在だ。

「で、俺を呼んだからには用があるんですよね」

「ええ、はぐれエクソシストのフリードは覚えてるわよね？その男がエクスカリバーの一本を持ってたの。イツセーと小猫とアーシアと裕斗。ソーナの兵士。教会の聖剣使い2人がフリードと聖剣計画の首謀者に出会ったのだけれど、裕斗と教会の2人は逃げた2人を追つて連絡がつかないの。あなたの神器で探索に向いたカードないかしら？」

「……生憎ですけど、“天命の札”にはありませんよ。逆の効果を持つたカードならありますけどね」

八幡はコカビエルのことをリアスとソーナ、各No.2にししか話していなかった。自分の発言一つで戦争になりかねない出来事を簡単に口にするのは彼女等には重圧過ぎる。実際、オカルト研究部にこそいるが、どこの派閥にもいない八幡一人の発言では上の悪魔は簡単には動かないだろう。寧ろ、こういった状況こそ彼女等の真価が問われる。リアスとソーナが駒王学園にいるのは、スクールライフを満喫することではないのだから。ただし、フリードを追つた3人を含め一誠達はこの事実を知らない。最も木場については連絡が取れないである。

「隠者（ハーミット）ですわね」

朱乃といえど八幡の所持するカードを全て把握しているわけではない。知つていても、組んでいた当時は未熟だったため今の戦闘技術を高めたカードは不明な部分が多い。中でも“天命の札”の中でも特殊な能力を宿した“月（ムーン）”“審判（ジャッジメント）”“節制（テンパランス）”“死神（デス）”“世界（ワールド）”などは一切不明。八幡自身隠していた理由もある。

反対にソーナはほとんどの“天命の札”の情報を持っている。無論、彼が追跡に適したカードを所持していないのも承知していた。それでも、わざわざ呼び出したのは一切を自分の口から“天命の札”の情報を話す気はないからだ。その点は八幡は認識していれば、感謝もしている。

リアスも大まかに“天命の札”を文献で調べている。どれもが曖昧なものばかりであてにはならない。“天命の札”は所持者によって技も戦法も変わってくるからだ。

例えば“太陽（サン）”。炎という点は変わらない。ただコカビエルと戦ったような恐竜を参考にした戦いは八幡のオリジナル。代々“天命の札”の所持者はそのようにオリジナルの戦闘スタイルを編み出してきた。

真羅椿姫は“天命の札”は種類や名称が曖昧。なので神器に合わせて所有者が戦うことから“神器舞踏”と勝手に呼んでいる。その呼び名を気に入ったソーナもそう呼んでいる。聞いた八幡は嫌そうだった。うっかりセンスないですねと言いかけたが、言葉を呑み込む。それも虚しく顔に出ていたのか椿姫の拳が飛んできたのはまた別の話だ。

「……動けるようにはしときますよ」

コカビエルを認識しての言葉。リアスにそれだけ言い残して帰路を辿ろうと背中を見せると声がかかる。

「そういうえば伝言があるわ」

誰からだ、問いかけてよとした直前に先に内容を喋るソーナ。腕を組み、表情は困っていますと書いてある。彼女に伝言一つでこんな顔をさせられるのは一人しかいない。聞かせられる八幡も背筋が凍る思いだ。

「はーちやーン！お義姉ちゃん最近会ってないから寂しいなあ。ソーたんも冷たいし、今度の夏休み一緒に菓子折り持って来ちゃいなよ。多分、両親揃ってるから。あ、もしかして2人でどっか旅行行っちゃおう？急接近しちゃう？私叔母さんになっちゃおう？もー、ソーたんに先を越されちゃうのは悔しいけどはーちゃんならいつか。今度、

そつ……』このまま中身のない会話が延々と続くけど聞く?」

「……いやいいです聞きたくないです知りたくないです」

淡々と棒読みで聞いてきた内容を話すが、伝言を寄越した本人がどんな顔で話していたか思い浮かぶ。下らない内容を聞かされたソーナに同情をする他ない。しかし、その苦労を肩代わりしたいかと言われればそうではないし、八幡より付き合いの長い側近だっているのだ。愚痴もそつちに吐き出すだろう。

そこでようやく帰ろうとしたところで、リアスの姿がないことに気付いた。

「あれ、部長は?」

一誠に続いて他の面々は公園の敷地を見渡す。

「部長でしたら一足先に帰るそうですわ。なんでもやりたいことがあるんだとか」

「そう。念のため、八幡を送って帰るわ」

「……うす」

「ちよつと待つてください! そいつはオカルト研究部の人間なんですよ! だったら兵藤に遅らせりゃいいじゃないですか! というか送る意味あるんですか! ？ そいつ強いんですよ! ？」

「支取先輩からのご指名だとお! 羨ましいぞ比企谷!」

生徒会長と副会長が八幡を家まで送るのに匙は抗議を申し立てる。コカビエルのことを知らない彼にとって八幡とソーナを自分がいないところで一緒にさせたくない。

「匙、あなたは椿姫と一緒に帰りなさい。彼はオカルト研究部にいるとはいえ人間」

「だったら俺がやります!」

「ソーナ様、ここは同じオカルト研究部として私がお送りしますわ」

「ごめんなさいね、個人的な会話も兼ねてるの。だから2人で話したいの。状況が状況だから出来るだけ一緒に帰って頂戴。もし、もし私に襲われるようなことになってもナイト様がいるから大丈夫」

オカルト研究部と生徒会は解散する。数人は渋々といった様子で2人を見えなくなるまで目視していた。特に匙は憎々しげに八幡を睨んでいた。それまでお互い同じ歩幅で歩み、言葉を交わすことはなかった。そこにカップル特有の甘い空気も険悪な空気もなければ、お互い無関心で気まずいわけでもない。

街灯が照らす道を無言の代わりに足音が静寂をかすかに打ち消す。

「……話ってなんですか？」

意外にも八幡から口火を切った。

「構えなくてもいいわよ。大した要件じゃないから。あと敬語やめてもらえないかしら。学校にいるときはそれでいいけど、今はため口にして。前は使ってたじゃやない」

「あんときは年齢知りませんでしたから。で、要件ってなんですか？」

「頑固ね……。まあいいわ、あなたリアスと同棲してるんですってね」

終始真顔だった八幡が苦笑を貼り付け、ソーナが屈託のない笑顔。口角は上がっている。目じりも下がっている。普段の彼女からかけ離れた状態。美少女にこんな笑顔を向けられて、なにも思わない男はそういないだろう。そんな幸せにいる本人は冷や汗を掻いていた。唼の奥の深淵の闇を想わせる瞳に捉えられた八幡は一瞬だけ息を詰まらせる。

「え、ええ。まあ占い師関連で。護衛ですね監視ですね」

「そう。まさか裸体の美女に抱き付かれてなんて公私混同してないでしょうね？」

「ひひやあ、ここここ心辺りにやいでしゆねえはい」

「本当かしら？長鼻の狙撃手並に嘔吐くから。それを確認するために行くんだけど。生徒会長だから」

「今からですか！職権乱用でしょそれ！」

「当然。じゃなきや意味ないでしょ。証拠隠蔽されても困るし」

「家散らかってるんで」

「掃除くらい手伝うわよ」

「今日両親いないんで間違い起きちゃいますよ」

「そんな度胸があるならどうして友達できないのかしらね？不思議だ

わ

「女子を自宅に入れたら死んじやう病なんです」

「8000人の部下を引き連れなさい……………。ほら、着いたわよ」

「……………」

八幡は彼女の性格を十二分理解しているつもりだ。これ以上の抵抗は無駄だと思い、全てを白状する勢いで玄関を開けた。正直にいえばソーナも酷く怒ったりはしないだろう。

「おかえりなさい。ごはんにする？お風呂にする？それともわ・た・し？」

(そう思っていた時期が俺にもありました)

玄関には白いエプロンを着用したリアス。ここまではいい。問題は服を着ていない点だ。こんなもの八幡が見れば声も出せないほどの慌てっぷりを晒す。そう、普段であればの話だ。確かにこの光景には頭が真っ白になるほど顔を真っ赤にする反面、右隣にいる先輩に怯え切った自分がいるのも確かだ。

不幸中の幸い、両親がいないというのは事実。

色欲と恐怖。この二つが混沌と化し、リアスはようやくソーナがいると知った。

「ソーナ？なんでいるの？」

こともなげに疑問を口にする。

「……………八幡」

「は、はい！」

人差し指と中指を立てた。

「お説教とお姉さまと二人つきりコース選ばせてあげる」

「いやいやいやいやちよつと待ってください違うんです無実です」

その日、不純異性交遊防止のために一人の少年を半殺した生徒会長は、この張本人を家から引き払わせた。男なら誰もが羨む短い同棲であった。半分は私情から来るものだ。

彼女にとって八幡に護衛が付くのは困るのだ。ソーナには夢があり、八幡が必要だ。その為には生徒会側になんとしても引き入れたい。“呪いの占い師”としても比企谷八幡としてもだ。

後（のち）に激闘を繰り広げるリアス・グレモリーVSソーナ・シトリーの戦局を握るのは“呪いの占い師”比企谷八幡であることはまだ誰も知らない。

数時間後、誰もが予測しかねる第三者の介入により聖剣を巡る戦いの幕が下りる。

かつての戦争を終結するきっかけを生んだ赤と白が相見える。

2人の到達者

疲れ切った部屋の主は、そつと銃に手をかける。

「帰っても休みがないなんて社畜の鏡になったもんだな」

窓には一枚の黒い羽と駒王学園と書かれた紙が窓に貼られていた。誰の演出かは明白。予感するまでもなく、今夜が決戦であると察した。装備を整える、部屋を後にして、駒王学園へ自転車を漕ぐ。

途中、朱乃から連絡から入り教会のイリナがコカビエルにやられたことなど報告された。

「比企谷！」

既に到着していたオカルト研究会と生徒会メンバー。木場の姿は見られないのは相変わらずだ。

駒王学園には全体をすっぽり収めるような形で結界が張られていた。その役割を果たしているのは、生徒会メンバー。

学園内で待機しているコカビエルが本気を出せば、この地方都市は消し飛ぶ。それを最小限に抑えるために生徒会メンバーが動いているのだ。

正面から進むオカルト研究部。最後尾を歩く男に生徒会長から声がかかる。

「八幡。本当はこの戦いに魔王の力を借りたかったの。この結界もどんなに頑張っても1時間が限度。頼りにしてもいいわね？」

「嫌がらせですか？そういうこと言われるとプレッシャーかかるんですけど」

「失敗したら舌打ちしてあげる」

「やめてください。傷つくんです、そういうのは。あと、聞こえるような小声で、使えねえなとかも言わないでください」

「その役割は椿姫がやってくれるわ」

「任せてください、会長」

「任されなくてください。地雷を踏まれるんで」

一通り軽口を叩き、微かな沈黙。

「……恋人がいるんで大丈夫ですよ」

八幡の視線には先を歩く朱乃の後ろ姿。

「そう。やっぱり彼女が最初の恋人なのね」

「使えるカードが多いことには越したことはないんでね」

そう言っつて小走りになることもなく、オカルト研究部を追う。

「あいつに恋人ついていたんですか？」

八幡の姿見えなくなつたところで匙からの質問が飛んでくる。

「比喩よ、ただのね。でも……」

ソーナは八幡から目を離さない。

「私が最後の恋人であつてほしいわ」

校庭には3人の人影。

初老の男。白髪の修道士。堕天使の幹部。

コカビエルは宙に浮きながら椅子に座っている。視線の先は苦汁を味わせられた八幡を見下ろしていた。

「バルパー、あとどれくらいでエクスカリバーは統合する」

「5分もいらんよ」

校庭の中央には魔法陣が敷かれた上には4本の発光した聖剣が浮遊していた。バルパーと呼ばれた老人は、ニタリと答える。

「エクスカリバーを一つにする気か。黙ってさせるかよ」

瞬時にバルパーを撃ち抜こうと無駄のない動作で、仕留めようとした矢先、冷たい殺気に当てられ思わず動きを止めてしまう。

邪魔をするなど言わんばかりに、殺意だけで動きを止めた。

「貴様らの相手は用意してある」

闇夜の奥から顔を出したのは、ケルベロスお呼びにミノタウロスの群衆。

「堕天使のくせに冥界の動物をよくもまあ集められたもんだ。動物大好きか？」

駒王学園の校庭には冥界の門番ケルベロスが3つの口を開けて雄叫ぶ。ソーナ達の結界がなければ一体に響いていただろう。一匹の獣を相手するのはオカルト研究部の面々。

八幡が相手するのは牛の頭を持ったミノタウロスの群衆。大の大

人の身長を優に超え、斧やら剣やら、果ては木の棒を各々利き腕に装備している。筋骨隆々の肉体の兵士は鼻息を荒くして八幡を凝視していた。彼らは素手で巨木をへし折ることなどたやすいだろう。それが武器を持つているのなら、鬼に金棒。標的にされている本人は涼しい顔で“天命の札”から一枚のカードを抜く。

「殺せ」

コカビエルの合図がかかると一斉に巨体の波が押し寄せる。怪物の疾走により地響きが校庭を襲う。

最前列にいたミノタウロスが斧を上段から落とした。下から突き上げられた拳で斧は砕け散り勢いの衰えない拳はミノタウロス1の顎を砕く。歯は何本も抜ける。そこから顎を鷲掴み、手首を捻れば嫌な音を立ててあらぬ方向に首が歪んでいた。

「運動は苦手なんだよ」

暗示されているカードは“力（ストレンジス）”。

「ストレンジス・オブ・ブラックキャット」

この日、木場には見せなかつた“力（ストレンジス）”の全力、“神器舞踏”が発揮される。

襲い掛かる大剣を2本の指ではさむ。攻撃を静止させると、大剣を持ったミノタウロスの首から血が噴き出す。並の刃物より切れ味を上回る手刀によるものだ。背後にいた別のミノタウロスの顔面に視線をやらず蹴りを入れ、顔がこれでもかともり込む。骨は砕ける。顔は窪んでいた。

強化された肉体が更に強化された攻撃力に見合わぬ、猫のような軽やかな動き。この状態であれば木場の魔剣はクツキーの如く簡単に砕くことは雑作もない。

「運が悪かったな、全員死運だ」

繰り広げられるのはミノタウロスと激闘を繰り広げる“呪いの占い師”。否、“呪いの占い師”に死の宣告された哀れな獣の一方的な殺戮ショーだ。

突き出された槍を噛み砕く。巻き付いた鎖は引きちぎる。勢いにのったハンマーを殴り飛ばす。レイピアは肌を貫かない。短剣を指

で弾いて粉碎。メリケンをはめた拳を手刀でぶつけ、手刀進行は収まらず手から腕の中へ侵入すると首に達した。これで50体目のミノタウロスを撃破。

大幅に強化された圧倒的腕力と速度と動体視力で行われるのは単純な暴力。目を抉られる者、首と別れる者、胸に穴が空く者。死因は様々だが、全て一人の人間が引き起こした災害だ。

(……妙だな)

素手による虐殺を繰り広げる中で自然と疑問が生まれる。

(冥界に生息するこいつらをこんなに連れてこられるもんか？ 墮天使の幹部なら容易いかもしれないが)

一つの仮説を立てる。幹部という役職の高さを利用して準備した魔獣。が、首を振って自分で否定した。

(いくら立場が良くても無理だ。第一俺はそれに苦勞した側だ。となりや手引きした奴がいるな)

導き出されたのは第三者の存在。協力者が悪魔なのを前提に新たな仮説を3つ立てた。

(単に金か何かで協力した悪魔。グレモリー家またはシトリー家を狙いとする悪魔。……禍の団(カオス・ブリゲード)か)

2つの仮説は第三者の目的であった。しかし、最後の仮説は明らかに第三者が誰であるか特定している。

かつて八幡が所属していた組織、禍の団(カオス・ブリゲード)。精鋭揃いのテロ集団。悪魔・墮天使・天使の和平をよく思わぬ過激派が揃っている。組織は言わば連合であり、一枚岩ではなくいくつ派閥に分かれている。派閥のトップは有名人ばかりである中で、八幡がいた派閥は小さな派閥であった。

そこにいた際、教わった“仙術”と呼ばれる技術が“力(ストレンクス)”に宿っている。

(やっぱ、ライザー戦で顔さらしたのはマズかったかもな)

組織を抜けた八幡。思い上がりでなければ禍の団(カオス・ブリゲード)の差し金だと踏む。げんなりしながら確実にミノタウロスを減らしていく。ミノタウロスの武器は八幡の体に触れることはない。

当たったところでダメージが通ることはない。

(こんなことするってのは何かしら起こすってことだろ)

最後のミノタウロスの胸に手刀を突き刺しても“力(ストレンジス)”の効果は切れない。

仙術は“力(ストレンジス)”でなければ発揮できない。通常の状態はもちろん、他のカードでも使用不可能。

「僕ちん忘れちゃダメエエ！」

「死ねえええええ！」

襲来する双方向からの挟撃。青白い聖剣を持つフリード、光の剣を持つココビエル。

フリードが持つ4本だったエクスカリバーは一本になっていた。明らかに1本では発せないオーラが宿っている。

これには舌打ちをして、エクスカリバーを回避してフリードの襟首を掴んで投げ飛ばす。背後から来るココビエルの攻撃は受けるしかなかった。背中に赤い一本の線を引く。“力(ストレンジス)”の効力のおかげだろう、切り口は浅い。

「俺さまおまえに辛酸なめさせられてんでね！あの日の屈辱晴らさせてもらうよん！」

「手段は選ばねえ！ さあて、制限時間はそろそろ切れんじゃねえのか！」

「……………」

一誠達の方はかなり手こずっている。ケルベロスの動きは明らかに洗練された動き。人間の世界で言えば、軍用犬だろう。体格を活かし、厄介であろう一誠を重点的に狙っている。数の理があるため、このままいけばケルベロスはどうということはない。

逆に言えば、終わるまで八幡の加勢に誰もいけないということだ。

「待たせたね」

ただ2人の剣士を除いては。

今度はフリードが2つの剣撃を受ける番になった。

「チィッ！邪魔すんじゃねえよ！三流剣士ども！」

交差した剣技を防ぐ。

「4本の聖剣が一つになったのか……!」

「向こうから回収の手間を減らしてくれるとはありがたい」

怒りを滲ませる木場とは対照的に、任務を意識したゼノヴィア。

「ひやははははは!俺さまを倒せるの前提で会話してんじゃねえ、よっ!」

邪悪な修道士が持つ聖剣が透過したした瞬間、木場とゼノヴィアの襟首が何者かに引つ張られ、景色が遠のいていく。視界に映る状態が正常になったときは、元凶の3人から離れた位置の戦闘を繰り広げるオカルト研究部の近くまで移動していた。

「なんのつもりだい、比企谷くん」

「おやおやおや、やっぱ一筋縄じゃいきませんねえ!」

八幡の行動に意図が読めない木場は睨みながら問いかける。待ちに待った憎い聖剣との闘いを邪魔され、頭に血が上る。それは女剣士も同様。

そんな時、フリードからの声が届く。よく観察すれば、彼らが建っていた地面には、幾つもの線で抉られていた。

「融合した聖剣の能力か」

「イエース!今使ったのは天閃の聖剣、擬態の聖剣、透明の聖剣。これでゴミ2つを片せると思ってたんですけどおおよく気づきやがったな」

仙術によって聖剣の形状が変化したのに、逸早く気づいた八幡の行動の結果がこれだ。

「くくく、焦ることはあるまい。全て揃えば最強の聖剣となるのだからな」

「バルパー……!」

聖剣計画を企てた張本人と被験者の再会。それは決して感動的なものではない。

悪魔の騎士の脳裏に深く刻まれた怒りと兄弟同然だった少年少女を失った悲しみが蘇る。

「あの時の僕は無力だった……!なんでもっと早く神器を、魔剣創造を使えなかったのか、後悔しない日はない……!あなたへの怒りも日に日に増していく……!」

「ほう、あの時の生き残りか」

「おやおや再会とは、ドラマティックですねえ。復讐は果たせねえで死んじまいな、ゴミ」

「そう言つてやるな、フリード。彼らの犠牲のおかげで成功したのだ、聖剣を使えるものを人工的に生む研究が。ちなみにこれが彼等だよ」
懐から取り出した光輝く球体。

「完成？ 僕らは失敗で処分されたんじゃないや……？」

声は震えていた。疑問を口にするが、読めてしまったのだ。バルパーの言いたいことが。聖剣計画の本来の姿を。

そして、バルパーの口から語れる聖剣計画の真実。聖剣を使うには必要な因子があること。それだけを抜き取ったこと。聖剣計画は未だどこかで行われていたこと。

全ては狂った研究者のエゴで行われたこと。

「聖職者とは思えないわね」

ケルベロスを仕留めたオカルト研究部の面々は、皆怒りを隠すつもりはなかった。

リアスの言葉に反応したバルパー。

「好きに言え。もつとも私の研究を教会連中を利用しているがな。忌々しい。改良して被験体を殺さないようにしてるんだろうが、やってることは変わらん。私を追い出しておいてな。記念すべき最初の成功作だ、くれてやる」

因子の球体を投げると、膝をつく木場に転がる。

見ていた八幡は同じように見ていたコカビエルに向き直る。

「茶番劇はもういいのか？」

コカビエルの挑発は聞き流された。

木場と八幡の神器への境遇は非常に似ていた。唯一、違う点は復讐を支えてくれる仲間がいる点だろう。証拠に彼の仲間が木場を見守っていた。

木場裕斗の復讐は木場裕斗が終わらせる。

八幡は復讐の矜持を理解していた。

「俺には聖剣などどうでもいいがな。そして、貴様には油断はない。

“呪いの占い師”!

飛翔するコカビエル。瞬時に察した八幡はコカビエルの頭上に移動し、腰をひねって全体重を踵に乗せる。交差した腕に阻まれ、脳天には届きえなかった。が、空に移動はされなかった。空中戦は八幡の望むところではない。まともに空中を動き回れるのは“星(スター)”のみ。

空から遠距離攻撃されてはジリ貧。他にも遠距離攻撃で戦えるカードはあるが、天地の差で言えば天のほうが有利なのは言うまでもない。

「簡単にはさせてくれないか」

「つたりまえだ。こちとらただの人間なんだ」

光の剣と拳が衝突しあう。激しい接近の攻防。コカビエルは破壊力抜群の光でごり押したかったが、そんな余裕を八幡が見せるわけではない。しかし、接近の攻防も終わりを迎えることになる。

「チツ。時間切れか」

後ろに下がって、“力(ストレンジス)”のカードが手元に出現。効力が切れた証拠。新たなカードを出そうとシャツフルさせる。その隙を逃すはずのないコカビエルは、地を蹴り翼の推進力で最短で詰め寄る。

「くたばれ!」

「させん!」

光の剣と八幡の間に割って入る破壊の聖剣。更にもう一本の剣がコカビエルに振り下ろされる。

「聖剣デュランダル……?」

「博識だな、占い師殿」

現れたゼノヴィアは2本の聖剣を左右に持ち、微笑して八幡の前に立つ。

「邪魔をしてくれるな、小娘。お前如きがデュランダルを使うなどおこがましいわ!俺が戦ったデュランダルの使い手ならば今の一振りで俺は消滅していたわ」

「であろうな、私が未熟なのは私が一番理解している。今の私では貴

様には勝てんだろう」

「ならフリードの相手をしている。占い師を殺したら、次にお前を殺してやる」

「フリードはここを統治する悪魔の仕事だ。それよりも墮落した天使を滅さねばだろう」

「ぬかせ。貴様になにができる」

「貴様？貴様らの間違いだろ」

“世界（ワールド）”

声が届いてきたと同時にコカビエルを縛り上げようと、鎖が蛇行しながら飛んでくる。

「もつといいカードきてもよかつたんじゃねえか？」

「いいだろう！まとめて相手してやる、飛べぬ蟻ども！」

そう言つて翼を扇ぐコカビエルは空を飛べない2人の人間を遠距離から仕留めようと狙う。引いたカードの詳細は不明でも、先手をうったコカビエルの考えは正しく、“世界（ワールド）”には、“太陽（サン）”のように圧倒的攻撃力もなければ、“カ（ストレンクス）”のような身体能力もない。

“天命の札”の中でも弱い部類に入るだろう。

両手に光を灯し、シャワーの如き光の矢が八幡のみに振り注ぐ。遠距離攻撃のできないゼノヴィアには成す術もない。

「むっ？」

ゼノヴィアは消えていた。どこを見渡しても姿形はない。

上から見た景色には光の矢を躲す八幡。先ほどまでなかった正四角形の何か。

「油断はよくないな、コカビエル」

「なっ!？」

自分よりも頭上にいたゼノヴィアの破壊の剣とデュランダルが重たい風切り音をたてた。左肩に破壊の聖剣が、右頬にデュランダルが墮天使に血を流させた。どちらも浅く重傷には至らない。

攻撃を与えたゼノヴィアはただ重力に従い、落ちていく。その背中には天使の翼も悪魔の翼もありはしない。

「ワールド・オブ・クッション」

どこからともなく現れた巨大なクッションが数十メートルに及ぶ場所から落下したゼノヴィアを包み込む。

「感謝する、占い師。そこらのベットより柔らかいな」

「感想そこ？」

「占い師イ！その女になにをしたあ！」

「はい、分かりましたって答えると思ってるのか？つっても大した能力じゃないけどな」

そう言いながら一つの巨大なボーガンが校庭から出現。巨大さもさることながら、通常のボーガンと違う点は、引き金がないという点だ。矢は槍の形状をしながら、フライトはついている。

考えるのは苦手な部類であるコカビエルは考察する。数多の戦闘経験から答えを導き出す。

鎖、クッション、ボーガン。順番に思い返していく。

ゼノヴィアの急上昇の謎。

(物体を生み出す能力か？それでは、あの小娘が飛べた理由はなんだった？)

思考の最中、飛来する巨大な矢。単発のそれを回避するのはたやすい。が、矢に鎖でつながれて剣を振るうゼノヴィアには不意を突かれた。それでもコカビエルにとっては遅い攻撃であつさりと防ぐ。ゼノヴィアの首を掴みへし折ろうとしたところで、

「させるわけないだろ」

背後にいた八幡が長剣を下ろした。

咄嗟に腕を離し、剣を回避。

「殺す手間が省けたわ！まとめて殺す！」

「せやああー」

黒と白の剣が混じり合う剣を持ったがコカビエルを襲う。

フリードは血の水溜まりに身を沈める。4本の聖剣は粉々になっている。もはや歴史の遺産ではない。

そばにはフリード同様死体になったバルパーが息絶えていた。

「フリードやられたのか、役立どもが！」

「待たせたね、比企谷くん」

「それは……」

「ああ、これは禁手化。聖剣と魔剣を合わせた聖魔剣だよ」

「聖魔剣だど？ちよつと待て……」

禁手化には驚かない。これまで幾度となく、見てきたからだ。

光と影は混じらない。どれが聖と魔も同じ。

「合っているぞ、聖剣使いの小娘。聖と魔は本来相いれない。しかし、そのガキの禁手化は成功している。であれば、答えは簡単だ。司るバランスの崩壊。ようは冥界の魔王だけでなく、神も死んだ」

先程までとは打って変わって、笑い声を漏らすコカビエル。誰もが彼の話の耳を傾けた。

「神は先の戦争で死んでるんだよ！故にバランスが崩れ、ガキが聖魔剣などという異物を生み出せたのだ」

高笑いしながら告げられた事実の絶望の表情を浮かべる元も含めた3人の信者。悪魔になるまで各地で治療を行ってきたアーシア。かつては神に縋っていた木場。深い信仰のもとで聖剣使いとなったゼノヴィア。

「……事情は冥界の純血種と似たような状況だったのでしよう。神が死んだなどと知られれば教会は崩壊しかねない。俺だけでも戦争を始める！」

「人を巻き込むなよ」

「クソ野郎が！」

1発の弾丸と赤龍帝の光線がコカビエルに直撃する。埃を払うように、手で払い霧散する。

「無宗教なもんでね。俺には無関係だ。無駄話聞かされて〃世界（ワールド）〃の効力切れただろ」

「ツけんな！お前の都合で俺のハーレム計画を邪魔させてたまるかよ！」

「ほう。占い師はともかく赤龍帝のガキは大きな口を叩くな」

「叩くさ……」

左手を突き出して、赤龍帝の籠手がまばゆい輝きに包まれる。

「ライザーのときも、フリードのときも……俺はなにもやれなかった。みんなの足を引っ張っているだけだ。そんなのもうごめんだ」

籠手の宝玉からの赤い光が一誠の全身を包み込む。

「なにもできないでいるのはムカつくんだよ！誰よりも腹が立つんだよ、自分に！」

ドラゴンを模した赤い鎧。

「禁手化 赤龍帝の鎧！」

1日で2つの禁手化が誕生した。

「十秒でケリをつける！」

占い師の恋人

光沢のある赤い鎧、体の部位ごとに嵌められた宝玉。

「10秒……ふ、ふははははは！ たった10秒でケリをつけるだど!？」

「そう言っただよ！」

一直線に背中に備えられたブースターが噴出。一気にコカビエルへと距離を詰めるものの、コカビエルは余裕で見切っている。赤い拳を避ける。

「トロいトロい！」

「油断はよくないといっただろ！」

即座に連携を図るゼノヴィアは背後から聖剣の双剣で連撃を繰り出す。

「余裕っていうんだよこれは！」

後ろ蹴りで腹を蹴り飛ばすことにより、地面を転がる。彼女を体全体で受け止め、転がる勢いを止める八幡。彼女の身を案じての行動と言われれば、認めるだろう。戦力の駒として使うからだ。

「す、すまない」

「いや、いい。それより聞け」

コカビエルには聞こえぬよう耳打ちする。念のため、読唇術を警戒して口元を手で返す。その所為か、声による空気が彼女の耳に直接触れ、くすぐったそうに声を漏らしていた。可能な限り、気にしないように話を続けた八幡の耳は赤くなっている。

八幡はコカビエルに一つの嘘を吐いていた。その時は役に立つかどうか分からなかった。結果的には少しは役に立つだろう。

八幡がゼノヴィアに耳打ちしている間、ラッシュをコカビエルにぶつける。速度と威力は次第に速くなっていくことに気付いた。それでも、余裕を崩さない。赤龍帝の力は強くても一誠自身の技術、格闘技が素人そのもの。速いだけなら、どうということはない。駄目押しに、一誠自身ついていけない。

「あと7秒だ。確かに素晴らしい神器だが、俺に追いつくにはまだまだだな。1秒ごとに倍に増しても、根本的にお前が弱いのでは話にな

らんな」

「うるせえ！」

「残り8秒」

馬鹿にしているのか、攻撃を一切しない。時間切れになったら、無力であることを味わせて殺すつもりでいた。

「ワールド・オブ・ソード」

横から飛来する白銀の剣。それを体を逸らすだけで回避する。勢いが無いせいで、校庭に突き刺さるだけで終わった。

「効力が切れたのは嘘か。ふん、今のお前はゴミ同様。……お前もな」
上からの斬撃を光の剣で防御。少し浮いていた状態から足が地面に着く。絶好のチャンス。

「らああああ！」

「無駄だあ！」

9秒経過した腰の入った一撃は重たい。光の剣の前には無駄であった。時間切れを起こした一誠の姿は生身を表し、悔しそうに、疲弊しきった顔が地面に触れた。

「それが」世界（ワールド）の正体か」

一誠に目もくれないで、八幡の足元にある巨大なスプリングを見た。

コカビエルの考察が正解に導かれる。

「物質変換と形状変化といったところか」

「世界（ワールド）」はあらゆる物質を別の物質に変えることが可能。その際、質量に見合っていれば、形状も変化可能。

スプリング。剣。クッション。鎖。全て校庭の砂から生み出した物体。ただし、生き物と液体は不可能。生き物は植物も含まれ、水や植物は作り出すことはできない。

「大当たり」

瞬間、ゼノヴィアは一誠を抱えた。その場から離れていき、異変が起きた。

ノヴィアつい先程、地面に刺さった剣から校庭に白銀が広がっていた。

「ワールド・オブ・ツリー」

「ぐおお！」

白銀に変わった校庭から葉のない白銀の枯れ木が飛び出ると、コカビエルに襲い掛かる。枝分かれした白銀は範囲が広い。精々かすり傷程度のモノ、決定打にはならない。これで仕留めようなどは微塵もかんがえていないのだから。

“世界（ワールド）”は基本、自分の手でしか発動はできない。剣を介して、“世界（ワールド）”の効果を発揮したのは八幡自身の技能である

「避雷針代わりだ」

なんとか逃げ切ったと思ったのも束の間、上空からの雷が降り注ぐ。コカビエルから離れた方向ではある。ツリーの傍にいれば、巻き添えをくらうだろう。

「力を見誤ったな」

冷静な表情に変わったコカビエルは巨大な光の槍をツリーに届く前に、雷をぶつけかき消した。雷は飛散し、朱乃は目を見開く。

コカビエルの言葉はどちらの意味なのか、コカビエルにしか分からない。自分の力が強いのか、朱乃が弱いのか。あるいは両方か。

これには予想外だったのか、素早く新たなカードを引く。

「いい加減、お前の顔も見飽きたぞ！」

「……させない」

小柄な体で立ちふさがる小猫。短い脚で蹴りを繰り返すも、禁手化した一誠には遠く及ばない。小猫に乗じて、他の剣士2人も連携を謀る。リアスと朱乃はいつでも攻撃できるよう距離をとって隙を伺う。下手に攻撃すれば、見方を巻き込みかねないからだ。

一誠はアーシアの横で戦闘を見届けていた。禁手化の反動だろう、もう動けない。リタイアだ。

「ええ……」

引いたカードを見て嫌そうな顔をする。そのカードは“天命の札”でも特殊な1枚で、所有者に力を与えるカードではない。所有者と条件を満たした相手のみ発揮する能力が宿っている。現状この場で

満たしているのはただ一人のみ。

八幡の顔をみて輝かしい顔でかつての相棒が詰め寄る。カードの裏しか見えなかったが、八幡の様子でなんのカードが把握した。八幡にとつてある意味一番厄介で、姫島朱乃からすれば一番好きなカードであった。八幡心の情がどうであれ、そのカードの強力は他の神器にも見られない能力が宿っている。

「あらあら、なんのカードなのか気になってしまいました」

「兵藤、本気出せ」

「だしつくした後なんですけど!?!」

「ほらほら早くピンチですわピンチ」

状況は極めて危険である。八幡も理解している。可能ならば使いたくなかった。かつての相棒がいやに調子に乗るからだ。

「……」 恋人（ラヴァーズ）”。パートナー・朱乃」

しぼりだした声に反応して朱乃は、恍惚そうに頬に手を添える。

「パートナー。うふふ、いい響きですわ」

“ 恋人（ラヴァーズ）” のカードを朱乃の胸元に当てる。カードは朱乃の中に吸い込まれていく。

直後、天から紫の雷が轟音を鳴らして朱乃に落ちる。天災をなんでもないように受けるどころか取り込み、全身に帯びていく。瞳がアメジストのように美しい輝きを灯す。

その様子に2人の剣士と格闘家の少女、墮天使のコカピエルも戦いの手を止め、朱乃に注視する。先ほどまでと違う威圧感、余裕が溢れていた。

占い師と巫女、ただ一緒に戦っていたから相棒と呼んでいたわけではない。ただ、連携を重ねていたから信頼があるわけではない。

“ 呪いの占い師” の“ 恋人（ラヴァーズ）” としての、真の実力。

「手加減できそうにありませんわね」

「その余裕どこから生まれてくるのか、知りたいもんだな。バラキエルの娘。占い師となにをやっていたのか知らんが、格上の俺には勝てねえ」

「……三人とも下がちなさい。巻き込んでしまいますわ」

父の話を持ち出され、勘に触れたのか声の温度が降下した。察した3人は下がり、戦いの結末を見届ける。

「……つまらん冗談だな。この俺を一人で相手取る気か？」
「冗談？ さっきまでの私だと思わない方がよくてよ」

朱乃の纏う紫電が激しさを増す。紫電を人差し指と中指に収束していく。手首だけで指先が弧を描くと、流星さながらの稲妻がコカビエルに飛来。咄嗟に光の剣で防御に回るが、光の剣は碎け散り紫電は軌道がブレることなく、コカビエルに直撃した。

電撃で硬直したコカビエルの刹那の隙が生まれる。

瞬時に詰め寄る瞳に紫の輝きを灯した朱乃の姿に、八幡以外の全員が驚愕する。彼女は中距離から雷撃を放つのが本来の戦闘スタイル。接近戦は専門外。しかし、リアスの知る限りあれほどの速度で移動する親友は知らない。

朱乃の右手には、火花を散らす紫電。硬直していたコカビエルは身動きが出来ない。ただ、黙って攻撃されるのを見守ることしかできない。白目になっていた目を見開き、濃い紫の瞳を睨む。

コカビエルの顔面に紫電の掌底を叩き込む朱乃。凄まじい電撃がコカビエルに走り、一瞬だけ2人の周囲は昼間のように照らされる。地面を転がるコカビエルは怒りで満ち溢れている。左頬は電熱で火傷を負い、肉が焼ける匂いが漂う。服や翼はもちろん、顔にも土が付着して、とても堕天使の幹部とは思えない。

「忘れられがちですが、女王は魔力だけでなく、パワーもスピードも高いんですよ。まあ、おかげで初めて”恋人（ラヴァーズ）”と女王の力を存分に発揮しましたけど」

女王は城、騎士、僧侶の駒の特性を全て扱える。朱乃の場合、魔法に突出してしまったためか、接近戦を得手としなかった。“恋人（ラヴァーズ）”では、紫電は扱えるものの、体がついていかず接近には向かなかった。

数年ぶりの能力を發揮。女王で得た身体能力が”恋人（ラヴァーズ）”に追いつく。二つの能力が本来の力を完成させた。八幡自身、この結果には驚いていた。

「クソが……!」

3本指を立て、三角形の紫電をコカビエルに指す。手首を捻りながら、腕を回す。そこから紫電で描かれる紫の円。一回転に終わらことはない。2回、3回と回転させていくと、段々と円が狭まっていくと渦が完成されていた。

雷鳴を響かせる紫電の渦。

呑みこまれて破壊されるか、避けた先に朱乃がいるかと選択肢が頭に浮かぶ。迷っている間に、一発の弾丸が肩に食い込む。八幡からの攻撃は察していたが、目を向ける余裕はない。この程度の当たっても支障はない、コカビエル。これまで死にかけた経験はある。どうということはないのだろう。

それが勝負を決定づけた決定的なミスであった。

選んだのは回避。上空に羽ばたき、追撃を警戒。案の定、帯電した掌底が腹に打ち込まれ、衝撃と電撃が襲い掛かる。意識が遠のきそうな中で、朱乃の腕を両手でがっしり掴む。かつての戦争を経験した堕天使、急激に強くなった朱乃に戸惑うが、彼女よりも強い悪魔と天使はいた。

身体が煙をあげる状態で白い歯をみせた。

「ナメんなー!」

「私には相棒がいます」

発言の意味がコカビエルには理解できなかった。周囲から見た者達は異変に気付いている。コカビエルの背後から紫電の渦が近づいてきているのだから。

「ど、どうなって、やがる! 2発撃ったのか?! いや追尾?」

「あなたは私の相棒を最後の最後で侮った」

雷鳴が唸る渦はコカビエルと朱乃を呑みこむ。紫電の影響を受けない朱乃は涼しい顔をして、声も出すがままならないコカビエルを見つめていた。

コカビエルは勘違いをしている。紫電の渦は正確には追尾ではなく誘導。強くなった朱乃でもそこまでの技術は持ち合せてはいない。種は八幡がコカビエルの肩に撃ちこんだ弾丸。避雷針の役割を果た

す弾丸であった。〃 恋人（ラヴァーズ）〃 で強力になった状態でも反映される。

占い師と巫女が組んでいた時期、これはお決まりのパターン。格上には特にコカビエルのように受けてしまう敵が多かった。

彼のミスはたった一発の攻撃を軽視したこと。

「彼が無駄な攻撃をするとでも？」

電撃が収まると、コカビエルは頭から地面に落下。頭から爪先まで黒焦げになった堕天使から紫の瞳をそらす堕天使の娘。戦乱を生き抜いただけあつて高い生命力を有しているのか、かろうじて息はある。

「冥界に名を馳せた〃 呪いの占い師〃 が意味のない攻撃をしたとでも？」

微かに痙攣するコカビエルに意識はない。彼に巫女の声は届かない。

「相棒であった私が弱いとでも？」

あれだけ苦戦していたコカビエルを相手に圧倒した相手にいともたやすく勝利した巫女。既に彼を敵として見ていない。

「さよなら、我が父の同僚さん。もう二度と会わないでしょう」

断言した彼女は背中を堕天使に向けた。もう向かってくることはない、確信を持つて。

しばらくして〃 恋人（ラヴァーズ）〃 の効果は切れ、胸元からカードがひとりでに八幡の元へ帰る。アメジストカラーの瞳はなくなり、いつも通りの茶色い瞳に戻る。

〃 恋人（ラヴァーズ）〃 と契約した者は自身の能力を格段に引き上げる。同時に思わぬ方向へ進化もする。姫島朱乃の場合、自身に紫電を纏わせ、接近戦を可能にした。

誰でもいいというわけでもなく、特定の条件がいくつかクリアしなくてはならない。でなければ、ただの発動しないカードとなってしまう。

「うふふ、〃 恋人（ラヴァーズ）〃 を使えばこんなものですわね。あのような連携ができてこそパートナーと呼ぶべきでしょう」

「いや、別に……」

「ヨブベキデシヨウ！」

「そうですね……」

「うふふふふふ」

朱乃以外にも「恋人（ラヴァーズ）」と契約している悪魔がいることを、有頂天の彼女は知る由もない。

決着はついた。

皆一息が付いたところで現れる。

「お見事」

上空からかかる声。全員が上を見上げた殺気には汚れ一つない白い鎧が浮かんでいた。背中には8枚の光の翼で羽ばたく。それはつい先程の一誠の赤龍帝の鎧に酷似していた。

「コカビエルをまるで子ども扱い。ここまでやるとは予想外だ」

「何者!？」

「白龍皇の神器を宿した者さ。初めまして、リアス・グレモリー嬢」

「白龍皇……！それって赤龍帝と対をなす存在の！」

「そう、神滅具の一つ。コカビエルを捕獲しにきた。アザゼルに言われてね。これじゃあ捕獲じゃなくて回収になるけど。せっかくコカビエルと戦えると思って楽しめると思ったんだが、とつくに倒されるんじゃ話にならない。代わりに収穫はあつたけどな」

「待ちなさい。一人で話を進めないで」

「生憎こちらはコカビエルの回収を言い渡されただけだ。それよりも俺の宿敵くん」

リアスを無視して一人で納得する白い龍の所持者は横に伏せる一誠を一瞥して言った。

この場にいる全員が理解していた、こいつはコカビエルよりも遥かに強いと。

『久しいの、白いの』

『起きていたか、赤いの』

一誠の神器から、白い龍の神器からの会話。二天龍の会話は短いながらも、戦争を止めるきっかけになったドラゴン同士の会話に誰も入

れない。

再会したばかりなのに、あつさりしたものですぐに話は終わる。

「強くなれよ、俺と戦う時までな。そして、“呪いの占い師”」

「え、俺？」

「お前ともいつか戦うことになる。たつた今決めた」

意味深な台詞を残して、黒焦げのコカビエルを脇に抱え、閃光とともに飛び立つ。

静寂が包む。今度こそ終わりを迎えた。

「終わったのね……」

へたり込むリアス。今日1日でいろいろありすぎた。上にいる立場の彼女は肉体的疲労よりも精神的疲労の方が大きいだろう。

主の前に膝をつく騎士がいた。

「僕は部長の眷属でありながら、勝手な行動をしてしまいました。命を救っていただいたあなたに恩を返すような仇で返すような真似、お詫びする言葉がみつかりません」

「いいのよ、あなたは戻ってきてくれた」

「もう二度あなたの意に背きません。あなたから頂いた騎士の駒に賭けて」

「……おかえり、裕斗」

「ただいま戻りました。我が主」

「じゃあ勝手な事した罰ね」

「え、あ、あの流れる的にそれはないんじゃないでしょうか」

「それはそれ。これはこれ」

手に魔力を覆わせたリアスは振りかざした。

それを見ていた八幡とゼノヴィア。

「悪魔とは皆こんなものなのか？」

「さあな、リアル充実している奴もいれば社畜に従事する奴もいる。グレモリーは慈愛に溢れているとか言われてるけどな」

「そうか……。お前との連携、悪くはなかった」

手にはパンパンに詰まった重たそうな袋。砕かれた聖剣だ。これで教会は大半の聖剣を所持することになった。

それだけ言い残して立ち去るゼノヴィア。

「……」

八幡の脳内には、かつて所属していた組織が浮かぶ。
「つたく、終わったもんだろが」

一人愚痴る少年はゼノヴィア同様そこから立ち去る。

“呪いの占い師”の物語が始まるまであと少し。

閑話

クーラーがきいた生徒会室には、生徒会の面々が各自の仕事をこなしていた。防音なのだろう、まだ日が明るい季節で、校庭と体育館で部活動に勤しむ生徒の掛け声は届かない。吹奏楽のラツパの音も聞こえない。ここで聞こえてくるのは、キーボードを叩く音とペンを走らせる音。

生徒会支給のパソコンに映し出されたに前年度の部費を参考に削れる予算を打ちこみ、賞や大会成績を残した部には、予算を上げられる数字を打ち込む。参考資料には、オカルト研究部の予算は0と記載されてる。部室にある高級カーペットなどの物資はグレモリー家の出費などなのだろう。

終わると保存をクリックして別の仕事に取り掛かる。生徒会の面々は仕事に関わる話もしているが、談笑もしばしば。

俺はステルスは発動してただ黙々と、カタカタツターンしていく。このように窓際社員よろしく誰かと極力会話することなく、淡々と仕事をこなしていく姿は、正に社畜の鏡と言えよう。

「八幡うるさい」

その発言で生徒会の視線が一気のこちらに集まり、動いていた舌は止まる。

なんだよ、会話つづけてろよ。注目しないでください。

ステルスを無効化した張本人はただペンを走らせている。心なしか笑いを堪えているようにも見えるが気のせいだろう。……貧乳めが。

「生徒会の仕事はどう?」

続けるようにこちらを見ないで口も動かした。

「生徒会でもないのに書類仕事どうなんですか?」

「初めてにしてはスムーズに進んでるじゃない」

「仕事の話じゃなくてですね。普通新人って先輩から懇切丁寧にやり方を教わるもんでしょ。特に部費とかやらせちゃ駄目だと思うんですけど」

「チェックするわよ。一週間くらいいいでしょ？」

会長の言う通り、一週間はここに足を運ばなければならぬ。

コカビエル戦での借りを返さねばならぬらしく、指名生贄にされた。コカビエル戦ならオカルト研究部も戦ったから得に問題はないんだが、後始末はほとんど生徒会が請け負うことになったのだ。確かにクレーターや死体の山。後片付けは並の苦労ではないだろう。

それを告げにきた会長の目元には若干の隈が浮かんでいた。ミノタウロスの死体がトラウマになりそうだったらしい。

他の生徒会も死体慣れしていないせいかな、大変だったそう。兵藤達はミノタウロスの死体は遠目からしか見ていないから、平気のようだ。

生徒会に借りを返すべく、売られてきたわけなのだ。不幸中の幸いというべきか、人とコミュニケーションを必要とする仕事は割り振られなかった。分からなかった時は、隣にいる真羅先輩に聞けばいい。彼女との会話は特に困ることはない。必要以上の会話がないうもそうだが、元々面識があるおかげだろう。

生徒会選んでなくて良かったなあ。毎日、こんな作業しなきゃいけないなら2日でバックレる自信がある。

「……………」

しかし、困ったことに生徒会で俺を面白くないと思う奴がいる。

匙とかいう同じ学年の支取先輩の兵(ポーン)がやたら俺に睨みを効かせてくる。誰の目から見ても彼は主である支取先輩に行為を寄せているようだ。悲しいことに彼女はそれに気づいていない模様。

彼女に構われる俺に嫉妬しているところだろう。

かといって、俺にはどうすることもできない。普段通りに流していても睨まれるし、支取先輩の誘いを受けようものならば余計に厄介なことになるだろう。というか、受けちゃったら終わりじゃねえか。

「あの、会長と比企谷さんってどういった関係なんですか？」

1年生から遠慮がちに質問が飛んでくる。

自分で言うのもなんだが、“呪いの占い師”は有名で、つい最近まで正体が謎に包まれていた。シトリー家のご息女との関係は疑問に

思われるのもおかしくはない。

「……そうね、友人という親しい間柄でもない。先輩後輩以前の付き合いでもあるわけだし」

会長は指で唇を隠すような仕草で記憶を辿っている。

だが、確かに俺たちの関係を言葉で表すのは難解だ。彼女の家に居候をしていた時期があったし、会長と副会長の特訓にも協力していた。しかし、友人というには距離もあったし、近づけないまま去ってしまった。

「強いて言うなら主従関係かしらね」

あえて言うならば、そうだろう。俺も同じことを言っていたかもしれない。

「それって私達みたいなの……」

「どうかしらね。私自身よくわからないわ。共に戦い、私の執事になっていた時もあった。でも、ほんの短い期間だけ。書置きだけ残して出ていく、愚か者だもの。おかげでこっちがどれだけ苦労したのかわかっているのかしらね」

まだ根に持つてるんですね……。でも、あなたのお姉さまはご存知でしたよ。

「じゃあ恋人とかだったりはしないんですよね!？」

今度は匙からの焦ったような口調が会長に飛んでいく。

「え、あ、うーん」

また悩む姿に生徒会のほとんどが衝撃を受けたのか、口は開いていたが声は漏れなかった。

「つつつ付き合ってたんですか!？」

半泣きの匙が会長に詰めよう。それを近くにいた生徒会が取り押さえる。

匙は血の涙を溢し、俺を睨みつける。他の面々は恋愛ネタに飢えていたのかニヤついて俺と会長を交互に見ていた。

「俺と支取先輩は付き合ってたねえよ」

「じゃあああどうして会長おは言い淀んだよおお!？」

「落ち着けよ……。恋人ではねえけど、婚約者候補にはなってたんだ

よ。先輩の親が勝手に決めてたんだ。俺たちは合意じゃない」
「ああん!？」

「匙、落ち着きなさい……。あなた、疲れてるのよ」

因みに彼女の姉の婚約者候補にもなっていた。それを告げられた時は、俺と支取先輩は涙を流してしまいそうになった。当の本人は号泣していたが。

『はあ、ーちゃん結婚じよお、お!』

『こわいこわい!怖いですよ!』

「……俺たちの間に恋幕とかは生まれねえよ」

ふと昔のことを思い出しながら、自然と口を開いていた。

あそこにあつた光景は仲のいい一家が温かく暮らしていただけだ。俺はその一部は味わっていたに過ぎない。

「一緒に暮らしていた。それだけだ」

生徒会に設けられた部屋は静寂でいっぱいになる。血涙を流していた匙も興奮が収まり、俺の言葉に耳を傾けていた。

「彼の言う通り、私と八幡の間にあるのはただのビジネス関係。私の夢に関わるね。私の夢には彼が必要な」

そう、俺たちにあるのは利害の一致だけ。そういった意味では俺は彼女を信頼している。

故に俺たちの間にはなにもない。

「でも、キスはしたわよね」

「ちよバツカ真羅先輩!」

が、いい感じに終わりそうなところで、真羅先輩からの爆弾発言。

それにより室内がが先程よりも熱を帯びていく。女子数名の甲高い悲鳴が響き渡る。会長に詰め寄る生徒会女子連中。真羅先輩は微笑んで仕事を続けている。

この女……!!

彼女ばかりに意識を向けているわけにもいかない。目の前の怒り狂った匙から逃げなくてはならない。今の匙には人間の言語は通じ

ない。

「比企谷ああああああ！」

この日は怒り狂った匙に追いかけて終わってしまった。

『おおい、生きてる?』

『よし、はーちゃんって呼ぼう!』

『初めまして、ソーナ・シトリーです』

『意外と連携考えてるのね』

『学校?え、まあ少ないわね。それがどうしたの?』

『それが“恋人(ラヴァーズ)”の条件なの?』

『私のモノになりなさい、八幡』

『私はいいわよ、あなたが婚約者でも。……なんて、本気にした?』

『お姉さま、私と八幡であなたを打ち倒します!』

『また会えるとは夢にも思わなかったわ。体育館裏まで顔貸してくれるかしら』

閑話・神器説明

1 【愚者】

???

2 【魔術師】

???

3 【女司祭長】

発動している間、常に回復している状態。痛覚は正常なので、治つてもダメージ相応の痛みはある。激痛でショック死も考えられるため、危機感は忘れない。部分的に回復速度を速めることが可能。

4 【女帝】

宝石を自由自在に操れる。防御よりのカードで攻撃も可能。操れる範囲は半径20m以内の中距離。宝石の大きさは自由だが、大きければ大きいほど、疲労が大きくなってしまう。

5 【司祭長】

???

6 【恋人たち】

特定の人物の能力を引き上げる。どのように進化するかは、神器の所有者もやってみるまでは分からない。

発動している間は、神器所有者は他のカードを使えない。また、誰でも出来るというわけではなく、特定の条件をいくつか達成しなくてはならない。

神器所有者も条件全て把握できるとは限らない。

7 【戦車】

???

8【力】

身体能力が向上する。決定打やトリツキーな戦法は行えない代わりに、22枚の中で最もバランスがよいカード。神器舞踏のおかげでより強力な能力を発揮する。

9【隠者】

五感でこの状態を探すのは困難。発動している間は何に触れても指紋も匂いも残ることはない。

隠密に有用。戦闘では使い道はあまりない。しかも、使える機会はそうそうない。過去、戦闘中に引いてしまい、涙ぐみながら撤退した経験がある。

10【運命の輪】

???

11【正義】

聖なる力を宿した十字架。汎用性は非常に高く、悪魔に有効なカード。ライザー戦で見せた能力はほんの一部でしかない。無論、光の操作は八幡自身の神器舞踏による技能。

12【吊るし人】

???

13【死神】

???

14【節制】

???

15【悪魔】

悪魔の駒なしで配下に出来る。

16 【塔】

???

17 【星】

空を自由に飛び回れる。飛行速度はそこそこで戦闘も可能。

18 【月】

???

19 【太陽】

小型の太陽。炎を操る技術は本人次第で、歴代の中には全く扱えないままで直接ぶつけることしかできない者もいた。八幡は恐竜をベースにしているが、歴代では十二支をベースにした使用者もいた。

20 【審判】

???

21 【世界】

物質変換、形状変化。

石ころを金の延棒に変えることなどができる。使い手の知識次第で戦術の広くも狭くもなる。複雑な形状をした物は時間をかければ作れたりするが、作れなかったりもする。

剣や鎖は比較的簡単。液体を作ったり、生命を生み出せない。逆もまた然り、液体や生命には効果がない。あくまで物体のみ。

【天命の札】

21枚のタロットカードの原型にした神器。引くカードはランダムで、使用者には選ぶことは例外を除き不可能。制限時間もあいまいで正確には把握はできない。

使用者によって使い方は大きく変化する神器で、使用者によっては【世界】で精巧な機械造ったとされる書が残されている。【星】をレ-

ザーとして飛ばすことも可能にした人物もいたが、当代の所有者にはできない。

【神器舞踏】

神器の所有者によって使用方法が変わるので、真羅椿姫が勝手に命名した。

閑話・過去1

現代の日本ではあまり見られない建物を無常に破壊していく無地の黒衣を纏う少年。

八幡、そう八幡だ。身長は今に比べ小さい方だ。

地面に伏している死体の背中からは蝙蝠に似た翼を生やし、死体によつては長い耳を持った死体が瓦礫に埋もれていた。少年を除いて、この場には人間はいない。冥界と呼ばれる次元で襲い掛かる悪魔に一切の情けをかけず、命を奪う。ついさつきまでは綺麗だった建築物も姿は消え失せ、死体と並んでいる。

冥界最大の領土を持つ“ゲアプ”の一角を壊滅させた八幡。

「派手派手しいな」

女性は煙草に火をつけて、崩壊寸前の工場の屋根に腰掛けていた。白衣の下にはパンツスーツ。

良く見れば、彼女の吸う紙煙草の先端は光っている。火によるものではない、微かな桃色に灯っている。

「最初は“月（ムーン）”で次に“隠者（ハーミット）”。 “塔（タワー）”が来たのは大分後で大変でしたよ」

「なんにせよ陽乃の言う通り、私の加勢は必要だったわけだ」

彼女の視線の先には“ゲアプ”の戦車を担っていた男が伏していた。息は既がない。2割は八幡が倒したが、ほとんどは煙草を吸う彼女によるもの。同様に戦車に位置する男も彼女がやったものだ。

「俺も先生の神器みたいに汎用性のある能力だったらいんですけどね。俺の神器、長期戦向いてないですし」

先生と呼ばれた女性は紫煙で輪っかを作り、工場から降り立つ。工場内は死体で溢れ、薬品と機械が使い物にならない状態になっていた。素人には分からないような薬品や部品がそこら中に転がっている。

「君の神器は確かに使い勝手が悪い。ランダムでなければ、神滅具（ロングィヌス）と呼ばれてもおかしくないほどにな。使用者の腕も悪くない」

だが、と続けた先生は笑った。拳を握る。

「そっちの方が燃えるじゃないか！強ければ強いほどデメリッドが大きいなんて熱い展開を生んでくれる！」

「いや、漫画とかじゃそっちの方が盛り上がりますよ？デメリッドなしで俺TUEEEEEはつまらないですよ？でも、これ現実世界ですからね。コンテニューは効かないんですけど」

「話分かるじゃないか。俺TUEEEEEは銅の剣で十分だ」

「話が逸れてるんですけど……」

「逸れてなどいないさ。リスクのない人生つまらないものはない。例えば本人が望んでいなくともだ」

「良くも悪くですか？」

「その通りだ。普通いうのは実は非常に難しいのだよ。現状維持に徹しても、なにかをきっかけに出世してしまった。歩道を歩いていたらトラックが突っ込んでくる。山も谷もない人生なんて無理だ」

八幡の瞳を捉え、優しい声色で語り掛けた。

「だがな、ピンチになったら助けてやるのが私の役目だ」

「……………」

悪魔でも天使でもない、神器を所有した人間。

彼女は八幡に神器のいろはを教えた師。いや、神器だけではない。神器を必要としない格闘技など多くのことを八幡に教え込んだ。

今までは姫島朱乃というパートナーがいたおかげで、ハズレカードを引いても補ってくれていた。逆にパートナーの能力を強化することもできたが、一人で戦うというのは、八幡の神器では難しい。

「どうして“新英雄派”にいるんですか？」

“新英雄派”とは“渦の団”の一つの派閥に数えられる精鋭部隊。戦力は3人と少ないが、屈強の実力集団。

“渦の団”には“英雄派”と呼ばれる派閥はあるが、“新英雄派”の名目は新たな伝説・逸話を後世に残すこと。彼等の実力は一人一人が72柱の頭領クラスの實力を有している。煙草をふかしている彼女も例に漏れない。

「神器が使えるのに使わないのはもったいないからな。社会の役に立

てるじゃないか」

真偽はともかく、彼女等が滅した工場はドラッグの生産工場。2人は冥界中に公開するのではなく、壊滅を目的としていた。

「帰ろう。ゲアプの援軍が来てしまう」

「うっす」

「陽乃が早く例の“人工神器”を完成させてくれればもっと楽になるのになあ」

占い師と先生はゲアプの支配する一角に爪痕を残した。

“呪いの占い師”が“新英雄派”を裏切る前の過去。